

寺 山 古 墳 群
大 日 幡 山 城
出 丸 跡

岡山浄水場建設工事に伴う発掘調査

1997

岡山県広域水道企業団
岡山県教育委員会

寺 山 古 墳 群
大 日 幡 山 城
出 丸 跡

岡山浄水場建設工事に伴う発掘調査

1997

岡山県広域水道企業団
岡山県教育委員会

序

岡山県広域水道企業団は、広域交通網の整備によって西日本の新しい中核拠点として発展している岡山県の将来の水需要に対し、水質・水量共に安定した水道用水を広域的に供給するための事業を進めています。

本県の三大河川のひとつである吉井川において、現在、建設省の直轄事業として建設されている「苦田ダム」等の水資源を有効に利用するため、岡山市寺山地区において吉井川からの取水施設および浄水施設（岡山浄水場）をこの3月に完成させ、あわせて、そこからの送水施設の整備も推進しています。

今回の発掘調査の対象地は、岡山浄水場の西約500mに位置する丘陵地であり、将来、2万3,000m³の水を貯える鋼製タンク2基を備える岡山調整池の計画敷地です。

岡山浄水場で浄化処理した水を、平成11年の春には、この岡山調整池を通って岡山市（西大寺）、山陽町、赤坂町、吉井町、佐伯町、和気町へ送水を開始する予定です。

この計画敷地およびその周辺に山城跡ならびに古墳が分布しているため、発掘調査を岡山県教育委員会に委託しました。その結果、山城跡は大日幡山城の出城跡と判明し、古墳からは円筒埴輪や直刀等の鉄製品が出土するなど貴重な成果を上げられました。

本書はこれらの発掘調査の記録であり、これが埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるとともに、学術・文化等のために広く活用されることを期待します。

最後に、この発掘調査ならびに本書の編集にあたられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成9年3月

岡山県広域水道企業団

事務局長 小野 賢治

序

岡山県は、県北部から流れる旭川・吉井川・高梁川の三大河川を中心として、豊かな風土と歴史を形成してきました。なかでも吉井川下流域は、かつての高瀬舟の運航に代表されるように、西大寺や伊部といった交通・産業の要衝が控え、歴史的には国指定史跡である浦間茶臼山古墳や中世の西日本では有数の商業都市であった福岡の市が存在するなど注目される地域です。

一方、岡山県と流域の関係市町は岡山県広域水道企業団を結成し、水資源の有効利用を目的として岡山市寺山地区に調整池を建設することを計画しましたが、その予定地内には大日幡山城が周知されていたことから、岡山県教育委員会は、岡山県広域水道企業団と十分に協議を重ね、平成3年度に浄水場予定地内については試掘調査を、調整池および工事用道路用地内については分布調査を実施しました。その結果、止むなく文化財の現状保存ができない調整池、工事用道路用地内に立地する2基の古墳及び山城跡について、記録保存のための全面調査を平成7年度に実施することになりました。

発掘調査の結果、2基の古墳のうち、寺山7号墳からは円筒埴輪や須恵器・土師器をはじめ、直刀や馬具を含む鉄製品が出土しました。この調査で当該地区において希薄だった前半期古墳の実態の一端が垣間見えたのではないかと思われます。山城跡は、出土遺物は全体的に少なかったものの、遺構としては西側に堀切が発見されたことから、本格的な中世期の山城で、大日幡山城の出丸跡と判明しました。また、新たに弥生時代の墳丘墓や古墳時代の土器棺墓、中世の古道が検出されるなど貴重な成果をあげることができました。

このたびの発掘調査の成果が、文化財の保護や研究の一助として活用され、また地域の歴史を学習する資料として大いに活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、岡山県広域水道企業団岡山調整池建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の先生方には数多くの御指導と御助言を賜り、また岡山県広域水道企業団の関係各位からも多大な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

岡山県教育委員会

教育長 森 崎 岩之助

例　　言

1. 本報告書は岡山浄水場建設に伴い、岡山県広域水道企業団の委託を受けて岡山県教育委員会が発掘調査を行なった、大日幡山城出丸跡ほかの発掘調査報告書である。
2. 調査を行なった各遺跡は、岡山市寺山・内ヶ原に所在しており、全体の調査面積は2400m²である。
3. 調査としては試掘調査および全面調査を行い、試掘調査は平成3年5月に岡山県教育庁文化課の宇垣匡雅が、全面調査は平成7年4月から同年9月まで岡山県古代吉備文化財センターの横野芳典と根木智宏が担当した。
4. 発掘調査および報告書作成にあたっては、岡山県広域水道企業団岡山浄水場建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益なご指導とご助言を頂いた。記して深く感謝する次第である。

神谷正義（岡山市教育委員会）

根木 修（岡山市教育委員会）

亀田修一（岡山理科大学理学部助教授）

馬場昌一（邑久町教育委員会）

新納 泉（岡山大学文学部助教授）（平成7年度）

松木武彦（岡山大学文学部助教授）

西川 宏（岡山理科大学非常勤講師）

間壁忠彦（倉敷考古館館長）

（五十音順、敬称略）

5. 報告書の執筆および編集は、岡山県古代吉備文化財センター職員の根木智宏が担当し、平成8年4月から同年9月にかけて行なった。
6. 本報告書に係わる石材については、倉敷芸術科学大学教養学部の妹尾 譲 助教授に依頼し、有益な教示を受けることができた。記して感謝の意を表する次第である。
7. 出土遺物および図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

凡 例

1. 本書に用いた高度は、海拔高である。
2. 本書の掲載図に示している方位は、すべて磁北である。
3. 本報告書の遺構および遺物実測図・遺物写真的縮尺率は、下記のとおりに統一しているが、例外について縮尺率を明記している。

遺構実測

全体図 1/500 土壙・溝状遺構 1/40 土層断面図 1/40

遺物実測

土器・瓦 1/4 金属器 1/2

遺物写真

土器 1/3, 1/4 金属器 1/2 石器・古銭 1/1

4. 大日幡山城出丸跡の調査については、国土座標にしたがって、10mの方眼を調査区に設定して、実測を行なった。
5. 第2図は、国土地理院発行の1:25,000地形図「備前瀬戸」を複製し、加筆したものである。
6. 塗輪の外面調整方法で用いた分類は、以下の論文に準処した。

川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 1978年9月

本文目次

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 調査および報告書作成の経緯	5
第1節 発掘調査に至るまでの経緯	5
第2節 発掘調査および報告書作成の体制	6
第3節 発掘調査および報告書作成の経過と日誌抄	7
第3章 発掘調査の概要	11
第1節 寺山古墳群の遺構と遺物	11
(1) 寺山7号墳	12
(2) 寺山8号墳	22
(3) 遺構に伴わない遺物	23
(4) 寺山9号墳	25
第2節 大日幡山城 出丸跡の遺構と遺物	29
1) 大日幡山城の概要	29
2) 調査の概要	33
(1) 郭面上の遺構と遺物	34
(2) 郭面以外から検出された遺構と遺物	37
第3節 その他の地点	41
第4章 考察	45
報告書抄録	49

図 目 次

第1図 遺跡位置図	1	第24図 寺山9号墳 出土遺物(1/4)	27
第2図 周辺の遺跡分布図(1/25000)	3	第25図 出丸跡 調査前地形測量図(1/400)	29
第3図 調査地区全体図(1/1500)	9・10	第26図 出丸跡 調査後地形測量図 および東西断面(1/400)	30
第4図 寺山7号墳・8号墳 調査前地形測量図および 瓦片出土地点(1/200)	11	第27図 出丸跡 繩張(1/500)	31
第5図 寺山7号墳・8号墳 調査後地形測量図(1/200)	11	第28図 出丸跡 郭面からの下がり部分 土層断面(1/160)	32
第6図 寺山7号墳 墳丘断面(1/40)	12	第29図 出丸跡 南北断面(1/160)	32
第7図 寺山7号墳 主体部(1/20)	13	第30図 郭面上の遺構および 遺物の検出・出土状況(1/300)	33
第8図 遺物出土状況(1/200)	15	第31図 柱穴1 平面・断面(1/40)	35
第9図 寺山7号墳出土須恵器(1/4)	15	第32図 土壙1 平面・断面(1/40)	35
第10図 寺山7号墳出土土師器(1/4)	15	第33図 土壙2 平面・断面(1/40)	35
第11図 寺山7号墳出土埴輪〔1〕(1/4)	16	第34図 土壙3 平面・断面(1/40)	35
第12図 寺山7号墳出土埴輪〔2〕(1/4)	17	第35図 溝状遺構 平面・断面(1/40)	36
第13図 寺山7号墳 主体部内出土鉄器〔1〕(1/4)	18	第36図 柱穴1・土壙2 出土鉄器(1/2)	36
第14図 寺山7号墳 主体部内出土鉄器〔2〕(1/2)	19	第37図 掘切・土塁 平面(1/300)	37
第15図 寺山7号墳周堀内出土鉄器(1/2)	20	第38図 構築遺構 平面・断面(1/40)	38
第16図 寺山7号墳出土馬具(1/2)	21	第39図 遺構に伴わない遺物 (土器 1/4、石器・鉄器 1/2)	40
第17図 寺山8号墳 墳丘断面(1/80)	22	第40図 第2地点 断面(1/80)	41
第18図 寺山8号墳 主体部(1/30)	23	第41図 第3地点 断面(1/80)	42
第19図 寺山7号墳付近表土出土瓦(1/4)	24	第42図 土器棺 平面・断面(1/10)	42
第20図 寺山9号墳・第4地点 調査前地形測量図(1/150)	25	第43図 土器棺(1/4)	43
第21図 寺山9号墳・第4地点 調査後地形測量図(1/150)	25	第44図 第4地点 平面(1/300)	44
第22図 寺山9号墳 土層断面(1/40)	26	第45図 第4地点 各断面 および出土瓦片(1/60、1/4)	44
第23図 寺山9号墳 遺物出土状況(1/80)	27	第46図 大日幡山城縄張略図および 遺構配置図(1/600、1/2500)	47

図版目次

- | | | | |
|-----|------------------------------|------|---------------------------------|
| 図版1 | 1. 寺山7号墳・8号墳 調査前全景
(東から) | 図版6 | 16. 構築遺構 検出状況
(東から) |
| | 2. 寺山7号墳主体部 検出状況 (西から) | | 17. 構築遺構 土層断面
(南から) |
| | 3. 寺山7号墳主体部 直刀出土状況
(南から) | | 18. 出丸跡 調査終了全景 |
| 図版2 | 4. 寺山8号墳主体部 検出状況 (西から) | 図版7 | 19. 出丸跡 全景 (福岡城方向を望む)
(南西から) |
| | 5. 寺山7号墳・8号墳 調査終了全景
(東から) | | 20. 第1地点 作業風景
(南から) |
| | 6. 寺山9号墳 調査終了全景 (西から) | | 21. 第2地点 調査終了全景
(西から) |
| 図版3 | 7. 出丸跡 調査前全景
(東から) | 図版8 | 22. 第3地点 土器棺検出状況
(東から) |
| | 8. 堀切部分 調査前全景
(東から) | | 23. 第3地点 土器棺出土状況
(南から) |
| | 9. 柱穴1 完掘状況
(東から) | | 24. 第4地点 調査終了全景
(北から) |
| 図版4 | 10. 土壙1 完掘状況
(東から) | 図版9 | 寺山7号墳出土須恵器・埴輪(1) |
| | 11. 土壙2 完掘状況
(東から) | 図版10 | 寺山7号墳出土埴輪(2) |
| | 12. 土壙3 完掘状況
(東から) | 図版11 | 寺山7号墳主体部内出土直刀 |
| 図版5 | 13. 溝状遺構 完掘状況
(西から) | 図版12 | 寺山7号墳周堀内出土鉄器(1) |
| | 14. 堀切部分(南側) 検出状況
(南から) | 図版13 | 寺山7号墳周堀内出土鉄器(2) |
| | 15. 堀切・土塁 調査終了全景
(北西から) | 図版14 | 寺山7号墳出土馬具 |
| | | 図版15 | 第3地点出土土器棺 |
| | | 図版16 | 出丸跡 出土遺物 |

第1章 地理的・歴史的環境

大日幡山城ほか関連遺跡（以下、関連遺跡）は、岡山市寺山・内ヶ原地内に所在する遺跡群である。岡山県下には、中国山地内に源を発する旭川をはじめ吉井川・高梁川といった三大河川が南流して瀬戸内海に注いでおり、岡山県南部に肥沃な沖積平野を形成している。

その中でも吉井川の流域は、以前の高瀬舟の往来からもわかるように全体的に流れが緩やかで、特に下流部分にあたる岡山市東部や長船町・備前市の西部といった千町平野の付近は、丘陵部の標高が海拔100mぐらいから200mまでと比較的なだらかで、山麓の平地には実り豊かな氾濫平野が広がっている。⁽¹⁾

関連遺跡のある大日幡山付近の当該地区の平地部分は、吉井川の数次にわたる氾濫によって形成された低地と自然堤防に明瞭に分けられ、地形的には集落が形成される安定した微高地は認められない。当時常に安定した土地は、山麓に形成されたわずかな扇状地に限られていたようである。現在の地名の沼や平島といった字名からも、こういった自然地理的状況の名残を理解することは難しくないであろう。

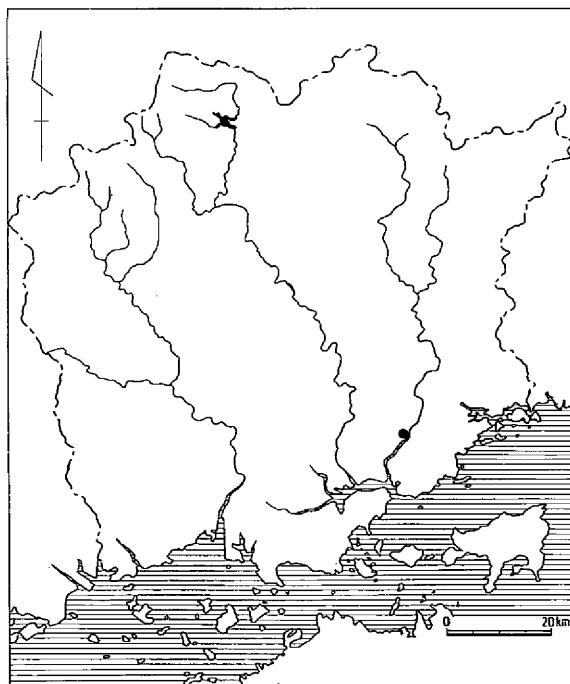
現在、関連遺跡が立地している大日幡山付近は、現在の地名でいう岡山市寺山と内ヶ原・浅川・檜原・才崎の各地区にまたがっているが、かつては古代の律令制施行以来、近世にいたるまで備前国にあって、その郡名は近年まで上道郡と称していた。

では、大日幡山の付近でいかなる歴史的発展が見られたであろうか。当該地区の付近において旧石器時代の遺構・遺物は、現在のところ確認されていない。また、近隣では大日幡山南側に位置する岡山市百枝月の西畠地区から柳葉形の石槍の一部が出土しているのみである。⁽²⁾

縄文時代になっても遺構・遺物の状況・傾向は変わらない。周辺部に集落の痕跡は、現在のところ確認されていないが、前期では岡山市沼貝塚、⁽³⁾後期では竹原貝塚が山麓部に形成され、ようやく人々の生活の痕跡がみられるようになる。また間接的な遺物ではあるが、岡山市浦間に立地する浦間茶臼山古墳の石槨の棺床粘土中から縄文時代のものと思われる石鎌が3点出土している。⁽⁴⁾

これらのことから大日幡山近辺での縄文時代以前の生活活動は、比較的緩やかな丘陵部分に限られ、集落の存在を思わせる遺構群の発見は、難しいのではないだろうか。

しかし弥生時代になると、前代までの山麓部分の僅かな扇状地地形に加え、平地上にも集落形成の萌芽が認められるようになる。近年発掘調査が行なわれ、当該地区の集落形成の初現と思われる岡山市西祖の西祖山方前遺



第1図 遺跡位置図

跡や西祖橋本（御休幼稚園）遺跡から弥生時代中期後半から後期末の遺構・遺物が確認されている。⁽⁵⁾さらに浦間茶臼山古墳の墳丘盛土の中からも後期の土器片が数点出土していることからも、一定規模の集落形成が十分考えられる。また大日幡山南麓部の才崎地区には、地点が特定できないが銅剣・銅矛をはじめとした青銅器が多数出土しており、⁽⁶⁾南側の微高地上に立地する高下遺跡等との関連性も含め、山麓南側にも大規模な集落の立地が考えられる。

古墳時代前半期になると、当該地区ではまず突如として浦間茶臼山古墳が築造される。浦間茶臼山古墳は、海拔25mほどの低丘陵地に築かれた県下では最古にして最大の前方後円墳で、昭和63年には発掘調査が行なわれている。⁽⁴⁾その後、吉井川右岸においては一層の定住化が進んだのか、大日幡山の山上には、茶ノ子山古墳や角山東塚古墳、内ヶ原古墳群、浅川古墳群など大小に関わらず、多種の古墳が築成されている。茶ノ子山古墳は発掘調査はされていないが、墳長約25mの造出を持たない前方後円墳で、後円部の頂部に竪穴式石槨が築かれている。調査例としては、銅鏡や筒形銅器が出土した浅川2号墳・3号墳や、直刀をはじめ、多くの金属器が出土した佐古山古墳などがあるが、これらわずかな資料で当該地区の概要を知ることは困難である。しかし近年では、岡山市竹原の高下遺跡の発掘調査が実施され、弥生時代後期から継続する比較的大規模な集落の存在も判明しつつある。

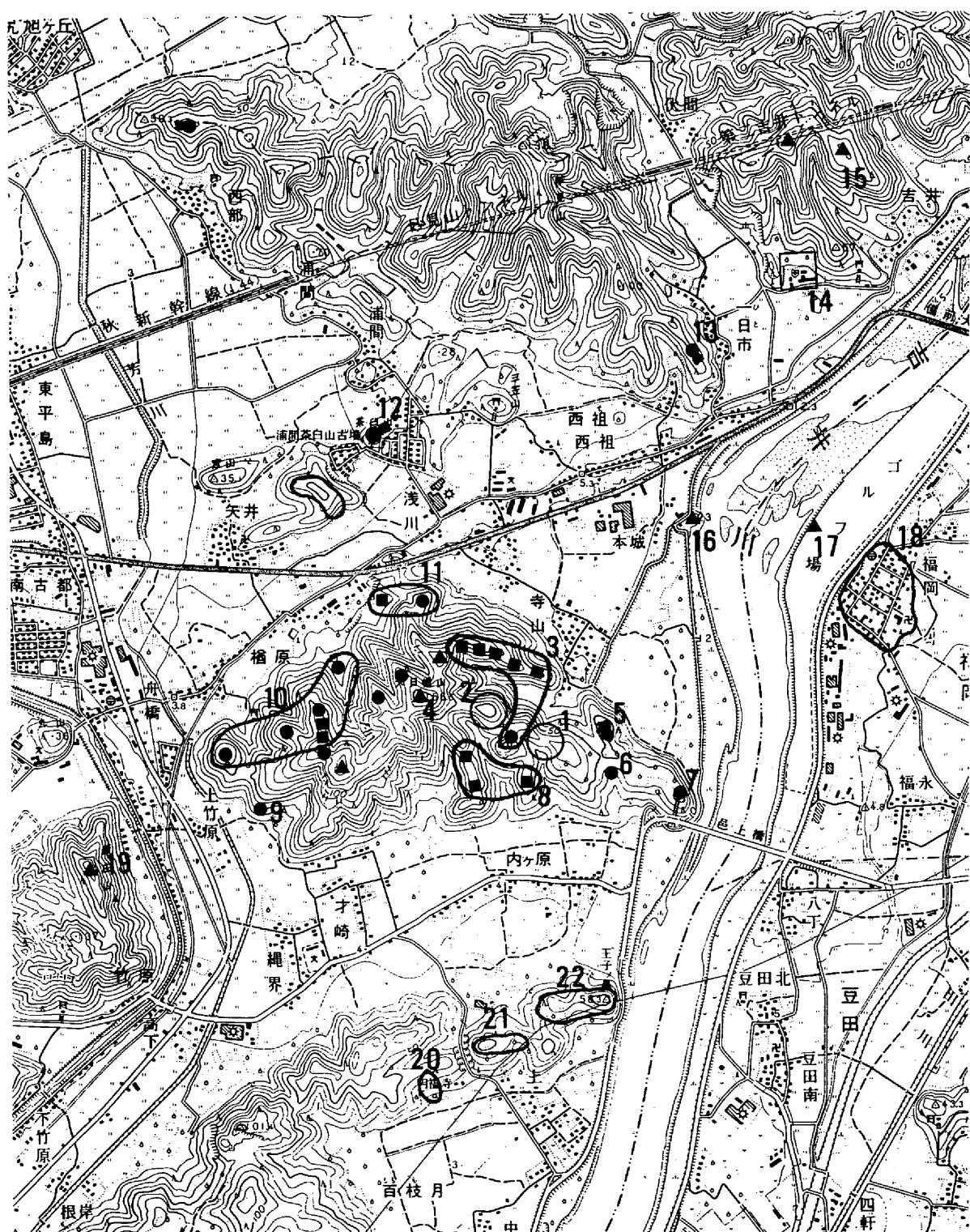
古墳時代も後半期になると、古墳の築造数が大幅に減少する。規模の大きなものでは、寺山7号墳・8号墳の東側に位置し、横穴式石室を有する角山西塚古墳や岡山市吉井に立地する全長約30mの前方後方墳の石津神社裏山2号墳がみられるに留まっている。特に、大日幡山の山上は、戦後のブドウ畠開墾等によって多くの古墳が破壊されたとしても、吉井川左岸の比較的遺構密度の高い状況とは全く異なる展開を示している。

古代の当該地区は律令制の施行に伴い上道郡内に含まれたが、奈良時代以降は特に目立った遺構・遺物は検出されていない。しかし、唯一岡山市吉井の吉井廃寺の一部が岡山市教育委員会によって試掘調査され、西門および築地の基壇と推定される遺構の一部と、平城宮式の瓦や綠釉陶器などの遺物が出土している。⁽⁵⁾この吉井廃寺は吉井川が平野部に流れ出る地点に位置しており、その詳細な実像はなお不明ながらもこの付近が当時から重要な拠点であったことは十分に理解されよう。

遅くとも平安時代末期の大日幡山の山麓は、立荘記事・地域からみても福岡荘の荘域に含まれていたものと推定される。⁽⁶⁾地理的には、大日幡山の対岸に邑久郡長船町の備前福岡遺跡が立地しており、昭和59年度の町教育委員会による確認調査において、柱穴・溝等の遺構をはじめ、備前焼などの遺物が多数出土している。⁽⁷⁾今日では備前福岡遺跡が著名な福岡市の故地であることは衆目の一一致するところであろう。福岡市は、吉井川の水運能力を背景として、また中世には山陽道の経路が福岡荘の北辺部を通過することによって、当時の西日本有数の商業都市として発展を遂げていった。

このように経済的地域基盤が整備されることとは、軍事的にも重要な地点となることでもある。現在、吉井川の西堤防上と東河川敷に一部分が残っている福岡城から半径2kmの範囲内に見える中世期の山城は、遺跡地図に記載されているだけでも6ヶ所を数える。時期は各々異なり、一概には言えないが、この地の経済的基盤を背景とした軍事的にも重要な拠点であったことを示しているものと考えられる。大日幡山城も出丸を含め地域的重要性とあいまってつくられたと言えるであろう。

しかしこのように繁栄を極めた大日幡山の山麓地域ではあるが、大永年間(1521～1528)と天正19(1591)年の洪水によって、福岡市の大部分は流出したことが今日知られている。⁽⁸⁾戦国時代の後半期には、宇喜多秀家の台頭によって政治経済の中心は現在の岡山市街地に移り、江戸時代には城下への街道筋とし



第2図 周辺の遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | |
|--------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 寺山7号墳・8号墳 | 7. 角山東塚古墳 | 13. 一日市古墳 | 19. 新庄山城跡 |
| 2. 大日幡山城出丸跡 | 8. 内ヶ原古墳群 | 14. 吉井廃寺 | 20. 百枝月西畑遺跡 |
| 3. 寺山古墳群 | 9. 佐古山古墳 | 15. 吉井城跡 | 21. 北ノ房古墳群 |
| 4. 大日幡山城 | 10. 植原古墳群 | 16. 福岡城跡 | 22. 王子ノ鼻古墳群 |
| 5. 茶の子山古墳 | 11. 浅川古墳群 | 17. 福岡奥之城跡 | |
| 6. 角山西塚古墳 | 12. 浦間茶臼山古墳 | 18. 備前福岡遺跡 | |

て整備がなされ、明治以降、各村々が合併して上道町を形成し、近年岡山市と合併して今日に至っている。

註

- (1) 岡山県企画部土地対策課『土地分類基本調査 和気・播州赤穂』 1982年3月
- (2) 岡山市市役所『上道町史』 1973年3月
- (3) 木村幹夫「岡山県上道郡竹原貝塚について」『吉備考古』第87号 1953年12月
- (4) 浦間茶臼山古墳発掘調査団『岡山市 浦間茶臼山古墳』 1991年2月
- (5) 岡山市教育委員会『西祖山方前遺跡西祖橋本（御休幼稚園）遺跡発掘調査報告』 1994年3月
- (6) 地元の聞き取り調査による。
- (7) 近藤義郎 編『前方後円墳集成 中国・四国編』 1991年2月
- (8) 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告』21 1991年3月
- (9) 鎌木義昌『岡山の古墳』（岡山文庫 4） 1964年10月
- (10) 国立歴史民俗博物館「日本莊園データ」2『国立歴史民俗博物館資料調査報告書』6 1995年3月
- (11) 長船町教育委員会『長船町埋蔵文化財分布地図』 1987年3月
- (12) 藤井駿 編『吉井川史』 1967年1月

第2章 調査および報告書作成の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経緯

岡山県は、流通センターや吉備高原都市の整備をはじめ、瀬戸大橋、山陽自動車道の完成を核とした中四国の中核拠点として今後の発展が見込まれている。このような状況を背景にして、県下各地において地域開発の進展、都市化の進行等に伴い、水道水の需要が一層高まることが見込まれるので、安定した水資源の確保のために上水施設の建設が必要とされている。このことから三大河川の一つである吉井川流域においては、上流部で吉井川の治水および長期的な水資源の確保を目的とする建設省の直轄事業の苦田ダム建設が進められている。一方下流域では、岡山県と流域の関係市町が岡山県広域水道企業団を結成し、その水資源の積極的な有効利用を目的として岡山市寺山地区に浄水場を、大日幡山の山上に調整池を建設することが計画されることとなった。

この事業について、岡山県広域水道企業団は、平成3年2月25日付け文書で、岡山市寺山地区における埋蔵文化財の調査について、岡山県教育委員会に協議申請を行なった。

この協議において現在の遺跡分布地図には、建設用地内に周知の遺跡は含まれていないことが確認された。しかし岡山県教育委員会は、対岸には中世福岡荘の中心地である備前福岡遺跡があり、吉井川を挟んで当該地区まで遺跡の範囲が広がっている可能性も考えられることや、調整池が建設される大日幡山の頂上部分には大日幡山城という中世の山城跡が立地することから、改めて用地内の試掘調査と分布調査を実施することで、岡山県広域水道企業団と合意に達した。その後、平成3年5月22日と23日に岡山県教育委員会文化課によって試掘調査と分布調査を行なった。試掘調査では浄水場の用地内には遺構・遺物は認められなかった。分布調査では調整池に向かう工事用道路上に古墳状の地形が1~2カ所、調整池建設予定地内には西側に堀切を有する中世の山城跡と思われる平坦面を確認した。

結果として、浄水場予定地内は中世福岡荘の荘域内には入らず、吉井川の旧流路もしくは山麓の低地であったものと考えられるので施設建設時の全面調査は不要、山上の確認された遺跡については、設計・施行によって遺跡の破壊が回避ができないときには改めて全面調査を行なうことで、岡山県教育委員会は、岡山県広域水道企業団との間で合意した。

同年7月12日に再度、岡山県教育委員会文化課は古墳状の地形の確認を行ない、8月22日の岡山県広域水道企業団との再協議で、調整池に向かう工事用道路上に古墳が2基存在する旨を岡山県広域水道企業団に伝えた。

その後、岡山県教育委員会は、岡山県広域水道企業団との間で用地内の設計変更も含め、協議を重ねてきた。しかし企業団が主張する施設整備の重要性や、今後の水事情の変化に対応できる早急な施設建設の実施が望まれることや、先般の分布調査で確認されている古墳と中世の山城跡の現状での保存は設計面から困難であることなどから、止むなく遺跡の記録保存の措置を執ることを決定し、平成7年度に対象となる遺跡群について全面発掘調査を実施することで岡山県広域水道企業団と合意に達した。

第2節 発掘調査および報告書作成の体制

岡山浄水場建設に伴う発掘調査は、岡山県教育委員会が岡山県広域水道企業団から委託を受け、岡山県教育委員会文化課が平成3年度に確認調査と分布調査を、岡山県古代吉備文化財センターが平成7年度に対象地の全面調査を実施した。

また発掘調査および報告書作成にあたっては、遺跡の保護、保存ならびに調査の専門的な指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「岡山県広域水道企業団岡山浄水場建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱した。

岡山県広域水道企業団岡山浄水場建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会 委員

神谷正義	岡山市教育委員会	根木 修	岡山市教育委員会
亀田修一	岡山理科大学理学部助教授	馬場昌一	邑久町教育委員会
新納 泉	岡山大学文学部助教授	松木武彦	岡山大学文学部助教授
(平成8年3月まで)			間壁忠彦 倉敷考古館館長
西川 宏	岡山理科大学非常勤講師		

発掘調査

平成7年度

岡山県教育委員会		次 長	葛原 克人
教 育 長	森崎岩之助		(文化課本務)
教 育 次 長	黒瀬 定生	總務課	
岡山県教育庁文化課		課 長	丸尾 洋幸
課 長	大場 淳	課長補佐	井戸 丈二
課長代理	樋本 俊二	(総務係長事務取扱)	
参 事	葛原 克人	主 査	石井 善晴
課長補佐	高畠 知功	主 任	木山 伸一
(埋蔵文化財係長事務取扱)		調査第三課	
主 任	若林 一憲	課 長	柳瀬 昭彦
岡山県古代吉備文化財センター		第三係長	江見 正己
所 長	河本 清	文化財保護主査	楳野 芳典 (調査担当)
次 長	高塚 恵明	主 事	根木 智宏 (調査担当)

報告書作成

平成8年度

岡山県教育委員会		次 長	葛原 克人
教 育 長	森崎岩之助	(文化課本務)	
教育次長	黒瀬 定生	文化財保護参事	正岡 瞳夫
岡山県教育庁文化課		総務課	
課 長	大場 淳	課 長	丸尾 洋幸
課長代理	松井 英治	課長補佐	井戸 丈二
参 事	葛原 克人	(総務係長事務取扱)	
課長補佐	平井 勝	主 査	木山 伸一
(埋蔵文化財係長事務取扱)		調査第三課	
主 査	若林 一憲	課 長	柳瀬 昭彦
岡山県古代吉備文化財センター		課長補佐	井上 弘
所 長	河本 清	(第二係長事務取扱)	
次 長	高塚 恵明	文化財保護主事	根木 智宏(報告書担当)

第3節 発掘調査・報告書作成の経過と日誌抄

発掘調査

発掘調査は、山麓に近い古墳から着手した。現地に赴いてみると、平成3年の分布調査の時に確認された古墳の位置が事前の伐採作業の後にも関わらず判然としなかった。

調査としては、まず最初に全長約20mのトレンチを東西方向に設定し、断面観察による確認に力を注ぐこととした。薄い表土を除去すると、明黄橙色の山土が認められ、表土と山土との間に中世から近世のものと考えられる瓦片が多数出土した。その後、トレンチ東端と約10mほど西側の地点から、地山面を削り込んでつくられた周堀と墳丘の盛土の一部が検出されたことで、分布調査の際に確認された古墳であろうと認識した。さらに、別の地点から直径約1m程のくぼみが現状で確認され、盗掘壙と考えられたのでトレンチを西側へ延長した。トレンチの断面にはよく似た墳丘状の盛土が観察され、頂部のくぼみの直下から箱式石棺が認められた。これらのことを受けて他にも隣接する古墳はないか、さらにトレンチを延長したが、その他の地点は表土の直下が岩盤で古墳の立地は認められなかった。

このことから、平成3年度に行なわれた分布調査の時に確認された古墳は2基として、調査を開始した。当該の古墳2基は、「岡山市埋蔵文化財分布地図」には記載されていないが、名称を付けるにあたって現在6号墳まで確認されている寺山古墳群の範囲内に位置していることから、東側を「寺山7号墳」、西側を「寺山8号墳」とし、名称については埋蔵文化財保護対策委員の方々の了承を得た。

中世の山城跡は古墳群の調査が終了後、郭面や斜面部分の下草刈りや伐採した樹木の除去作業から調査を開始した。調査は、測量用の基準杭を設定後、トレンチを設定して築城時の構築状況の把握に

努めた。当該山城は、寺山7号墳・8号墳と同じく『岡山市埋蔵文化財分布地図』に記載がなく、調査結果等からすれば大日幡山城の出丸跡と考えられるので、新たに「大日幡山城出丸跡」とした。

その他、尾根筋に若干不明瞭ながら不自然な盛土状の地形が認められたので、調査依頼者を通じて専門業者に工事用道路用地内全面の立木伐採作業をしてもらった。終了後、改めて表面腐葉土の除去作業を行なって尾根筋に沿ってトレンチを計10本設定したところ、3ヵ所のトレンチから6世紀代のものと考えられる土器棺墓と弥生土器が多数出土する地点・中世の古道跡が検出された。このうち、弥生土器出土地点を「寺山9号墳」として調査を開始したが、調査範囲の中で主体部が確認されなかった点や明瞭な盛土が確認されなかった点など疑問が残るものであったが、本報告書では弥生墳丘墓として報告する。

調査日誌抄

平成7年

4月1日 事業開始
4月10日 大日幡山城ほか関連遺跡 資材搬入
4月11日 寺山7号墳・8号墳 調査開始
6月2日 大日幡山城出丸跡 調査開始
6月14日 寺山7号墳・8号墳 調査終了
7月21日 埋蔵文化財保護対策委員会 開催
7月25日 第2地点 調査開始
7月26日 第2地点 調査終了
第3地点 調査開始

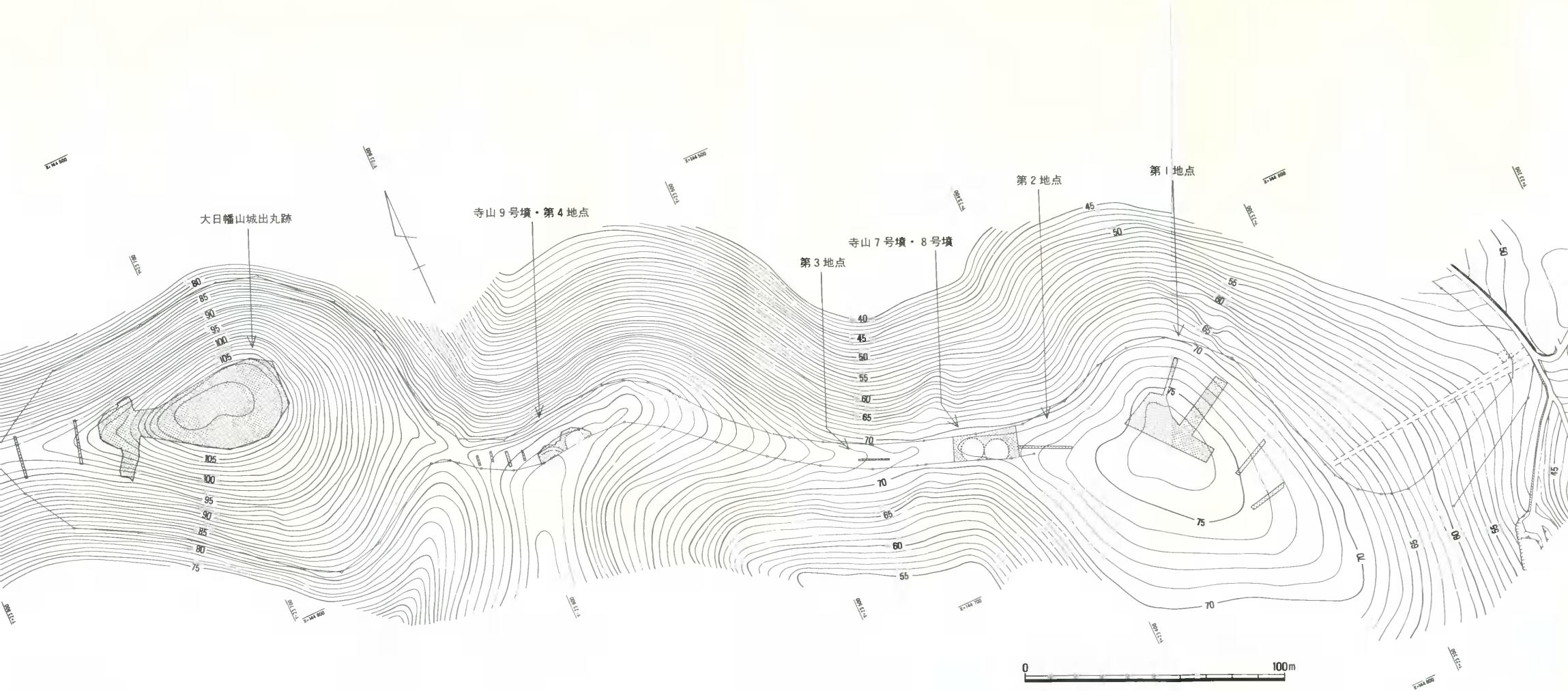
7月28日 第1地点 調査開始
寺山9号墳・第4地点 調査開始
8月7日 第1地点 調査終了
第3地点 調査終了
9月6日 寺山9号墳・第4地点 調査終了
9月22日 埋蔵文化財保護対策委員会 開催
9月27日 大日幡山城出丸跡
調査終了、後片付け
9月28日 現場・事務所 資材撤収
9月30日 事業終了

報告書作成

報告書の作成は、平成8年度4月から9月まで専従職員1名が行なった。

出土遺物の水洗・注記は発掘調査時にすでに終了しており、4月からただちに整理・復元作業を開始した。土器類については復元作業が終了したものから、また金属器については鋸落としが済んだものから順次実測作業と写真撮影を行なった。

その後、遺構の原図を整理して、出来上がった遺物の実測図とともにトレース作業を6月までに終了した。7月からは割り付け作業および原稿の執筆作業に着手し、遺物の収納作業や遺構・遺物の実測図の管理・保管作業等を平行して行ない、9月末の整理期間終了とともにすべての作業を終了した。

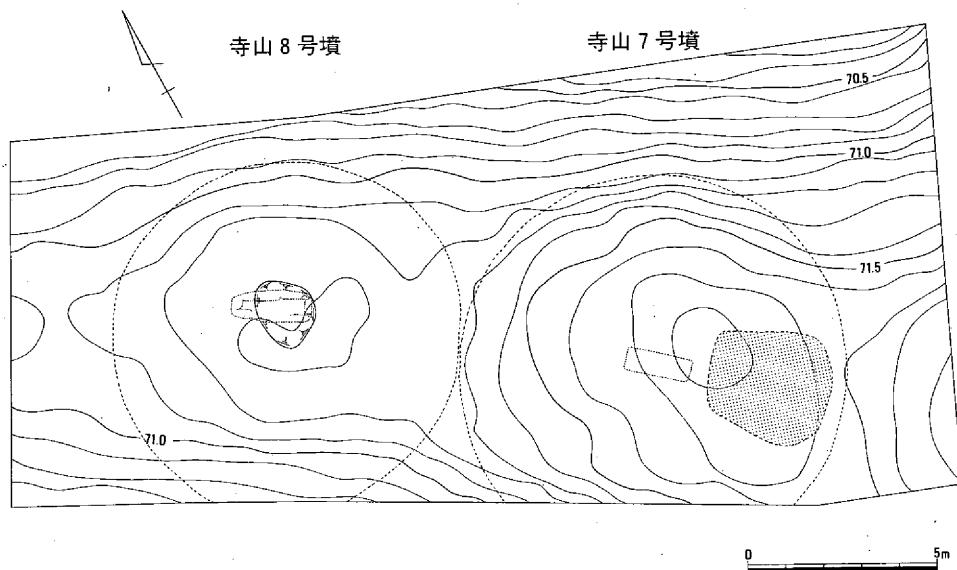


第3図 調査地区全体図(1/1500)

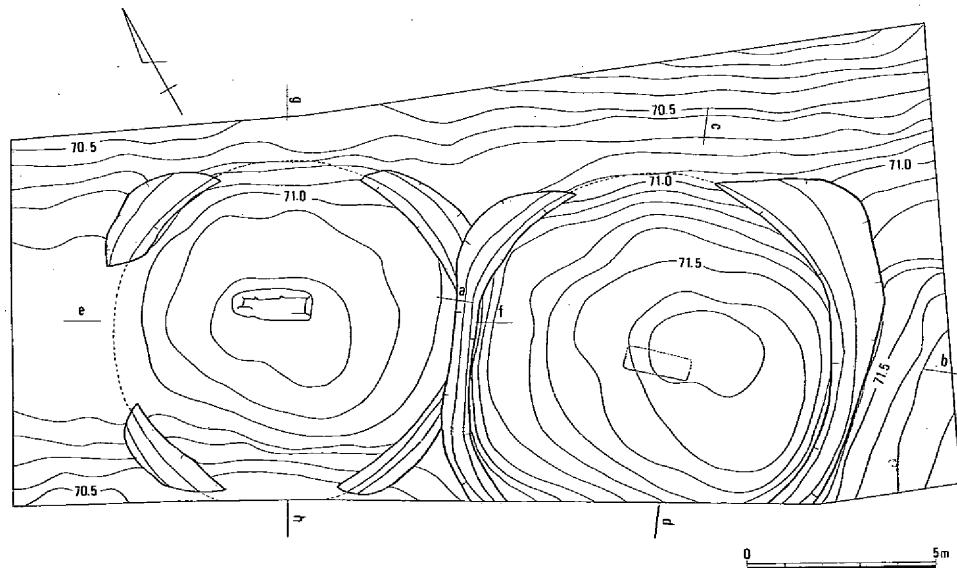
第3章 発掘調査の概要

第1節 寺山古墳群の遺構と遺物

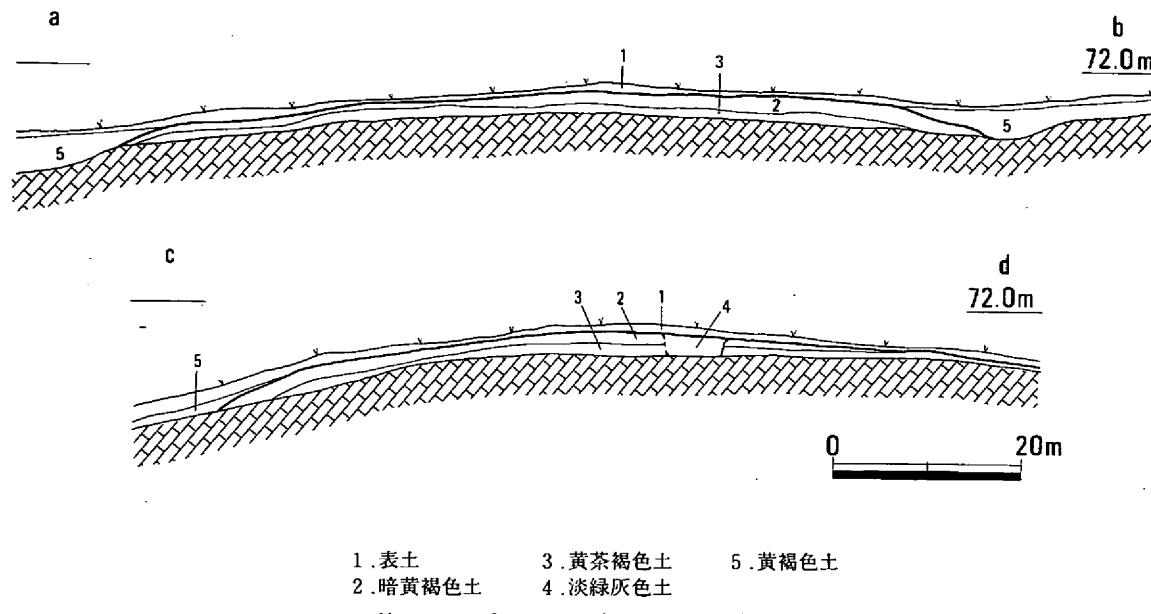
今回調査を行なった寺山古墳群は、大日幡山の山頂から東にのびる南北2つの支丘上に位置している。そのなかでも寺山7号墳・8号墳は南側支丘の海拔70m付近、墳丘墓と考えられる寺山9号墳は同じ支丘上の海拔87m付近にそれぞれ立地している。当該2基の古墳は『岡山市埋蔵文化財分布地図』



第4図 寺山7号墳・8号墳 調査前地形測量図および瓦片出土地点(1/200)



第5図 寺山7号墳・8号墳 調査後地形測量図(1/200)



には記載がなく、位置的には同一支丘上で用地外に位置する寺山1号墳と、北側支丘上に位置する2号墳から6号墳の古墳群と立地範囲が同一のものと考えられるので、分布調査の時に確認された2基の古墳のうち、東側を「寺山7号墳」、同じく西側を「寺山8号墳」とした。

(1) 寺山7号墳

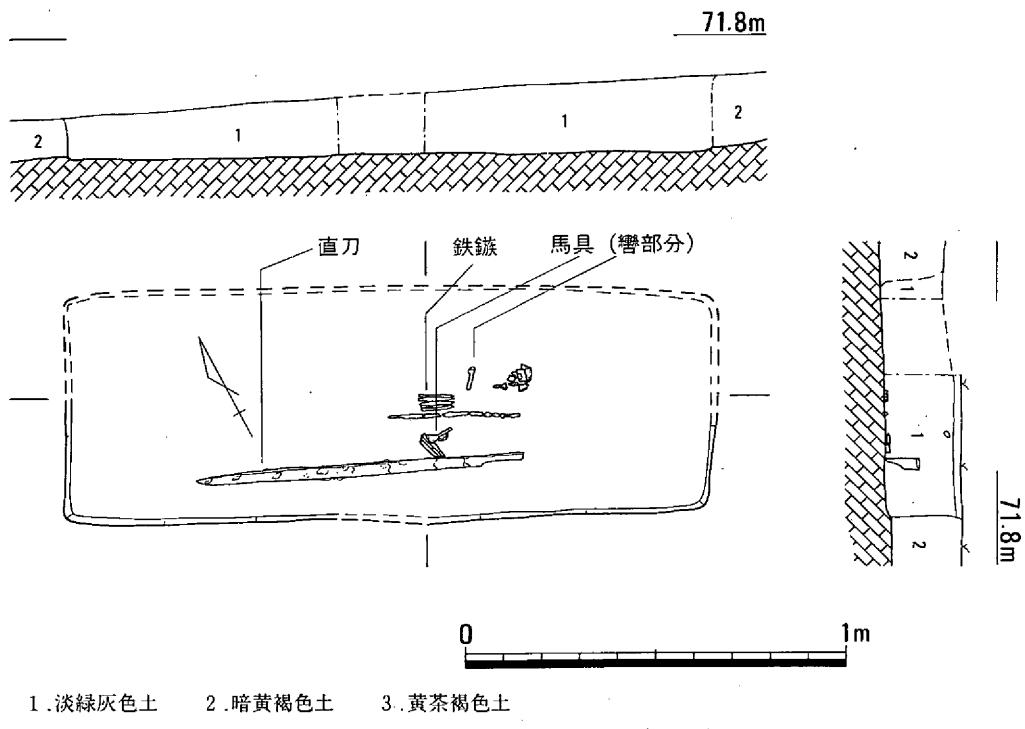
調査前の状況（第4図、図版1-1）

調査前の分布調査では、僅かに約50cm程の小さな古墳状の地形が、幅の狭い大日幡山山頂から東側にのびるもっとも大きな支丘上に築かれていた。全面調査時には、まず古墳の正確な位置を把握するために、東西に全長約25m程の土層断面観察用のトレンチを設定した。掘り下げてゆくうちに7号墳の周堀を検出し、続いて墳丘上からは円筒埴輪片や須恵器片・土師器片が多数出土したので、改めて全面調査の範囲を設定し調査を開始した。

墳丘と周堀（第5・6図、図版2-5）

前述のように墳丘上と周堀内からは、特に北側から東側にかけての地点を中心として円筒埴輪片が多数出土し、東側の墳端部分では僅か2ヶ所ではあるが原位置と思われる埴輪の底部も確認された。また8号墳と周堀が切り合っている西側付近からは、主に須恵器片や土師器片が出土した。墳丘はトレンチの断面観察から、地山面に黄茶褐色土と暗黄褐色土を積み上げて形成していたことが確認された。墳形は北側がやや隅丸方形形状の形態を呈す円墳で、径約9.5mを測り、盛土の残存比高は約1mであった。墳端の南側が用地境にかかっていたために、古墳の南部分については調査を実施することはできず、全容解明には至らなかった。

周堀は、尾根の頂部平坦面を分断するように東西方向にしか存在しておらず、北側については尾根が急斜となるのでだんだんと周堀はなくなって、北東部分では全く認められない。形態としては、地山面まで掘り壅めたものであった。また古墳の北東部分で部分的に深く掘り下げている地点が認められた。これはこの付近から尾根が北東方向に大きく曲がるので自然地形に影響されたためではないかと考えられる。その他の地点はほぼ同じく平均約20~30cmの深さを保って掘られていた。



第7図 寺山7号墳 主体部(1/20)

埋葬施設（第7図、図版1-2）

7号墳の主体部は、木棺直葬と考えられる。検出面での墓擴の規模は、長径約173cm、短径約62cmの長方形の形態を呈する。検出面から床面までの深さは、約10~20cmと極めて浅かった。北側に大木があって木棺の北半部と棺痕跡は確認することができなかった。出土遺物の状況から頭位は東側と考えられる。主軸方向はS 60° Eである。

遺物出土状況・出土遺物（第8~17図、図版9~14）

7号墳の埋葬施設内からは、直刀・鉄鎌・馬具・棺釘を含む鉄製品が多数出土した。また南西部の周堀内から須恵器や土師器が、また北側の周堀・墳丘上から円筒埴輪片が出土している。

須恵器（第11図、図版9）

須恵器は破片が多く、復元・図化できたものを示した。1はほぼ完形の大型の甕である。口縁部は段を付けて外反しており、外面頸部と口縁部の境に鋭い突帯が巡っている。また胴部のもっとも張り出したところに穿孔を外側から施して、内面は未調整である。また胴部には二枚貝による列点文が巡っている。全体的にヨコナデを施しているが、内面底部はユビオサエによる調整を行なっている。2と3は、中型の甕である。2は、頸部端部から胴部下半にかけて残存している。外面はタタキによって調整されている。胴部の張り出した部分に凹線が上に2条、下に1条巡り、凹線の間に波状文が施されている。また内面頸部と肩部の境にタテナデがみられる。3は、口縁部のみ残存している。口縁部は朝顔形に外反し、鋭い突帯が2条、その間に波状文が認められる。4は杯身である。たちあがり部分と頂部を欠いている。外面の底部は左回転のヘラケズリを行ない、内面全体と外面の口縁部から体部かけてヨコナデを施している。焼成状況は良好ではあるが、器表面の摩滅が著しい。5と6は無蓋高杯である。両方とも、外面の杯部から口縁部の境に突帯を巡らせている。脚部にはスカシが認められない。また脚部の裾はハの字形に開き、端部には上下2段の突帯が巡っている。6は、直口壺の口縁部である。わずかに外上方にのびる口縁部に2条の突帯とその間に波状文が巡っている。

土師器（第10図）

土師器も須恵器と同じく破片で主に西側周堀内から出土している。図化できたのは5点で、すべて浅い小皿である。口径は110～139mmを測り、器高は推定復元で18～28mmである。調整はユビオサエによる粗い成形を行なったのちに、ヨコナデを施す調整を行なっている。胎土は10を除き、緻密な粘土を使用しており、焼成はすべて良好である。9は底部内面にユビオサエの痕跡を明瞭に残す。11は内面と外面の一部に焼成時にいたと思われる黒斑が認められる。

埴輪（第11～12図、図版9～10）

出土した埴輪はすべて円筒埴輪である。焼成によって須恵質（13・14・16・21・22）と土師質（15・17～20・23～27）に分けられる。図示できたものを含め、すべて破片で出土しているために全高やタガの数等は明らかではない。口径は推定復元で、円筒形埴輪は20～23cm、朝顔形埴輪は38～46cm前後、底径は13～19cmの数値内に入る。出土した埴輪片には、口縁部を含め胴体部分が大部分を占め、底部はわずかしかなかった。色調は須恵質のものが橙色もしくは赤橙色で、土師質は浅黄橙色や淡橙色を呈している。胎土は全体的に長石・石英を含む砂粒の含有が多少はあるものの、須恵質・土師質を問わずその差異は認められない。すべて焼成は良好である。

13～15は朝顔形埴輪の口縁部である。東側周堀内から出土した。13・14の色調は砂粒を多く含んだ赤褐色を呈するもので、口縁部は大きく外反している。外面は口縁部の端部を引き伸ばす時にいた指頭痕を消すように端部にはC種ヨコハケを施し、その他には全体に荒いタテハケを行なっている。内面は荒いヨコハケの後、部分的に細かなヨコハケが行なわれている。接合面となるタガの裏側部分は工具によるナデが施されている。15は全体的に器表面の摩滅が著しいが、外面はタテハケを施したのちにタガを貼りつけている。内面は不明瞭ながらヨコハケが認められる。

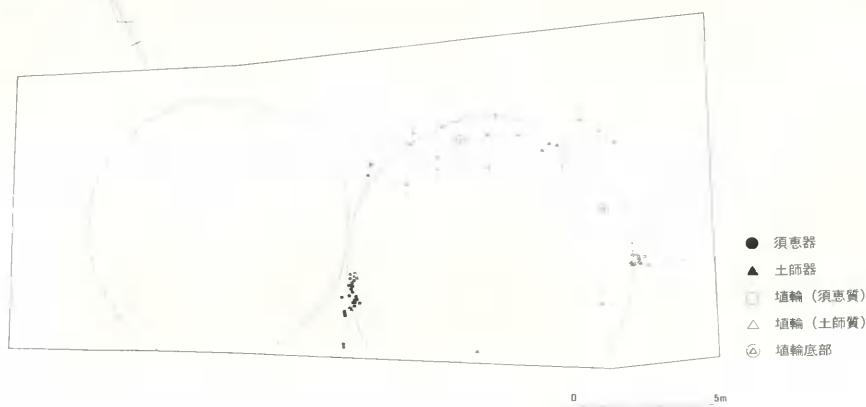
16～20は円筒埴輪の口縁部である。色調は須恵質の16は橙色、土師質の17～20は浅黄橙色を呈する。すべて8号墳と接する西側から東側にかけての周堀付近から出土した。16は外面を荒いタテハケで整え、17～20はB種ヨコハケによる調整が施されている。タガはすべて断面台形状を呈し、ハケによる上部のナデが行なわれている。内面調整は荒いタテハケののちに口縁端部付近にはヨコハケが施される16や、また2次調整のヨコハケが廉状になる17・18、荒いタテハケのみの23などが認められる。

透孔は6個体に認められ、中でも16が最上段の口縁部に不整円形が1つ、タガを挟んだ胴部2段目に正円形が2つ開いている以外は、すべて2段目に円形孔が左右対象に穿たれている。

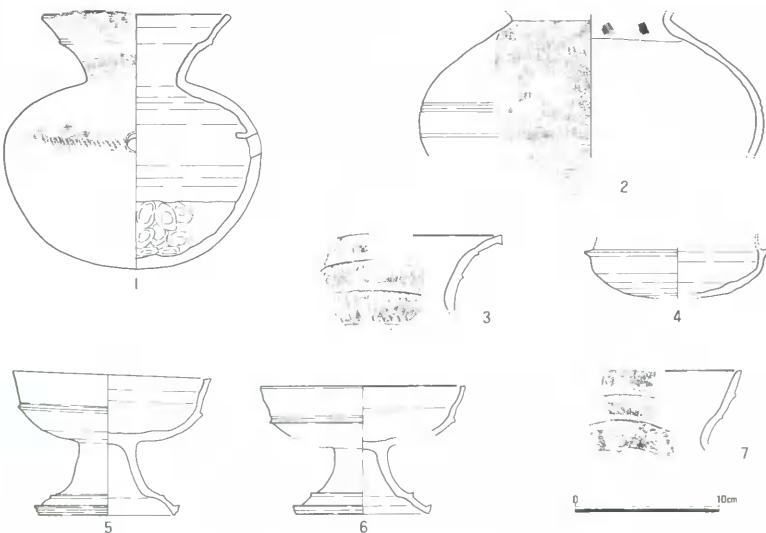
21～26は底部である。色調は須恵質の21がにぶい橙色、22が橙色を、また土師質の23・24～26は淡橙色・浅黄橙色を呈する。21は墳丘北西側からその他は周堀内から出土した。外面調整は21・22のように荒いタテハケの後、部分的に工具による斜め方向のナデが認められるものや、23の一部省略されたB種ヨコハケが施されたものや、24～26のように器表面の摩滅が著しいが、わずかに縦方向のハケメが見られるものの3種類に分けられる。内面は21・22が不定方向の指ナデ、23はタテハケ、24～26は指によるナデアゲが認められる。底部の端部は、ほぼ指や工具によるおさえ痕が認められる。

27は胴部である。色調は橙色を呈する。8号墳と接する周堀内から出土している。外面はタテハケの後にB種ヨコハケを施し、内面は全体にナデを行なってタガの上部には連続するヨコハケが認められる。タガの下部に透孔の一部分が認められる。

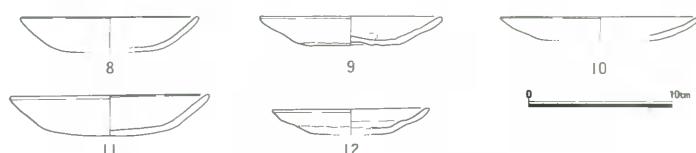
また17・27の外面の線刻文は、先の尖ったヘラのような工具によって刻まれており、17は下半を欠き、27はタガ上部の一部分のみで、その示す内容はともに不明である。



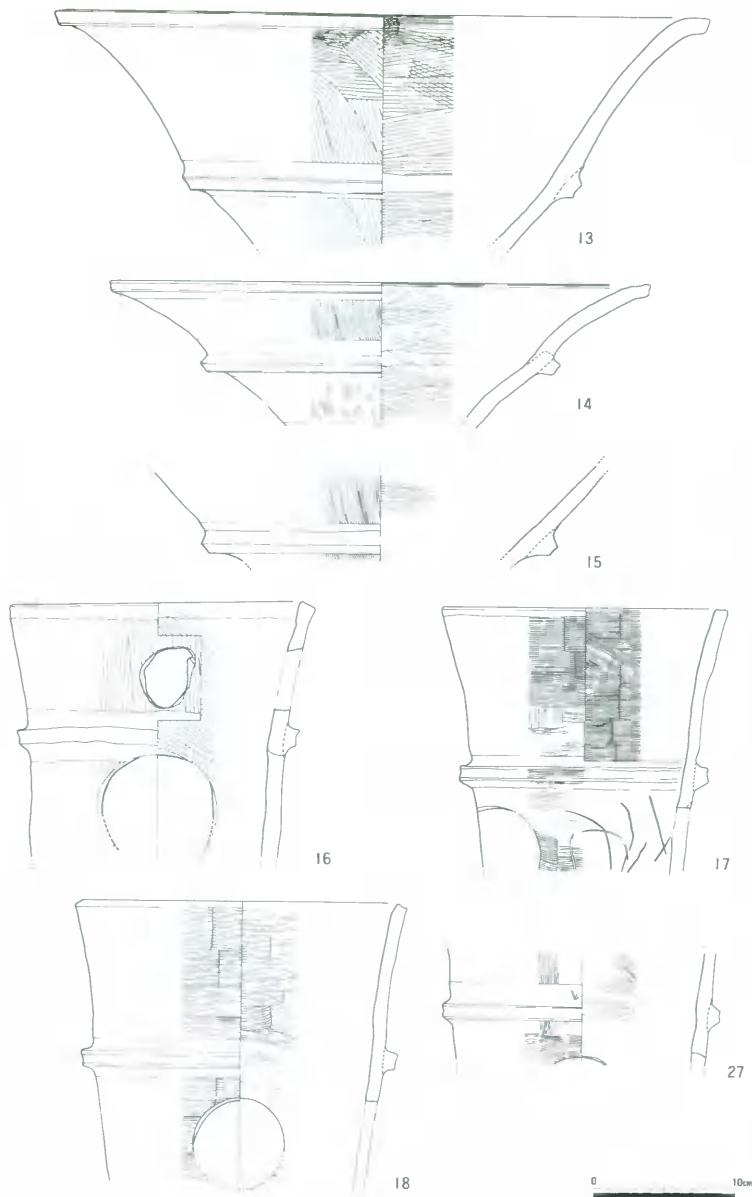
第8図 遺物出土状況(1/200)



第9図 寺山7号墳出土須恵器(1/4)



第10図 寺山7号墳出土土師器(1/4)

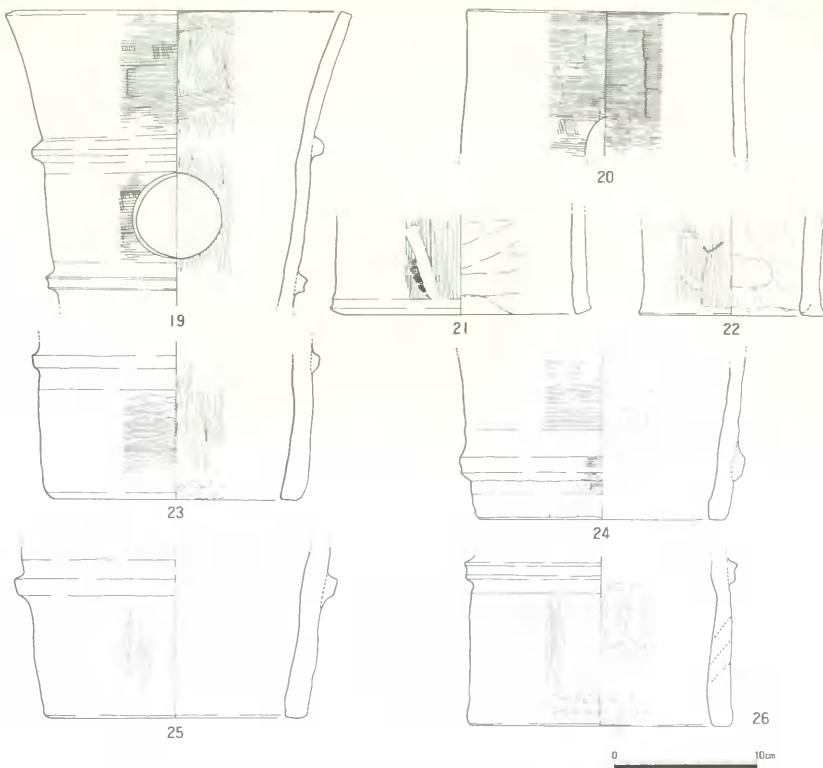


第11図 寺山7号墳出土埴輪〔1〕(1/4)

鉄器 (第13~16図、図版11~14)

総数129点が、主に埋葬施設と北側、西側の周堀内から出土している。

主体部内 (第13・14図、図版11・12)



第12図 寺山7号墳出土埴輪〔2〕(1/4)

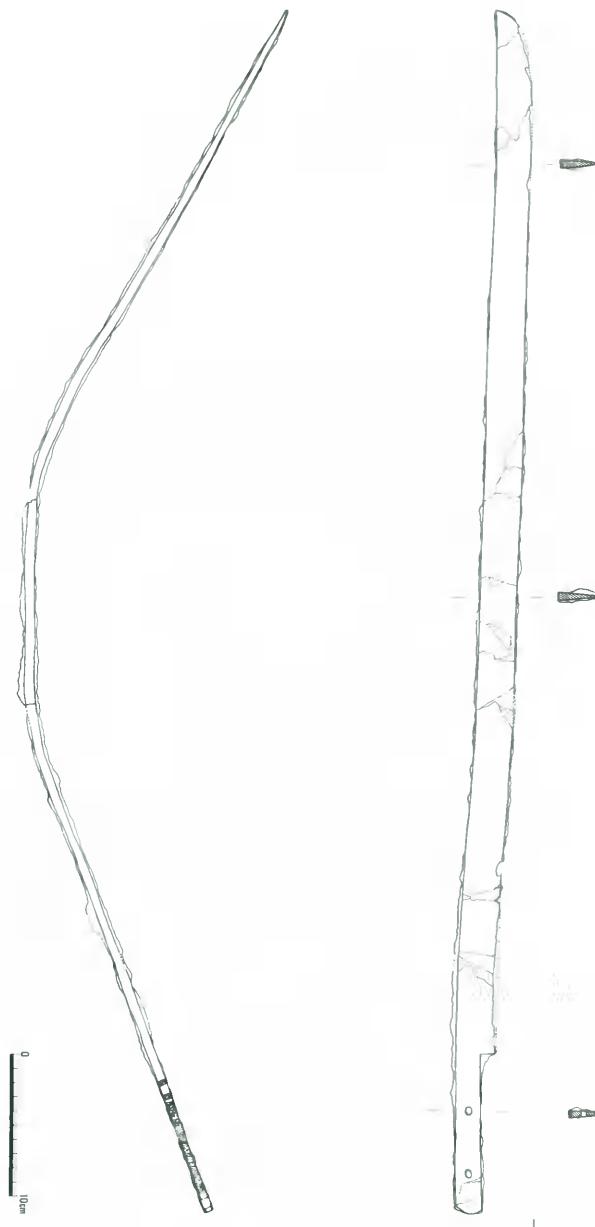
1は平造りの直刀である。掘り方の南側に刃を棺内側にむけて副葬されていた。関は直角になる片関で、茎基部は幅が1.8cmと類直茎の形態を示し、茎尻は直線をなす一字尻と考えられる。茎部には目釘穴が2ヶ所空けられ、茎の背には柄の一部と思われる木質が残存していた。刀身部は峰まで平均して幅6~7cmを測る。この直刀は2ヶ所を人為的に弓状に折り曲げて、峰と茎尻を棺に接するようにして副葬されていた。鍔や鞘等は出土しなかった。

2~27は鉄製の鎌である。埋葬者の頭部から胸部付近と思われる地点からまとまって出土している。器種はすべて長頸系の鎌で、鎌身頭部の形態から2種類に分類できる。A類(2~8)は平片刃造片刃箭式の鎌である。平均すれば、鎌身長は27~38mm、最大幅9mm、最大厚3mmを測る。また6の鎌身には、横位の木質が一部残っていた。B類(9~12)は同じく片刃箭式ではあるが、鎌身関部に逆刺を有するものである。その他、13・14は片刃箭式長頸鎌の刃部、15・16は長頸鎌の鎌身関部である。

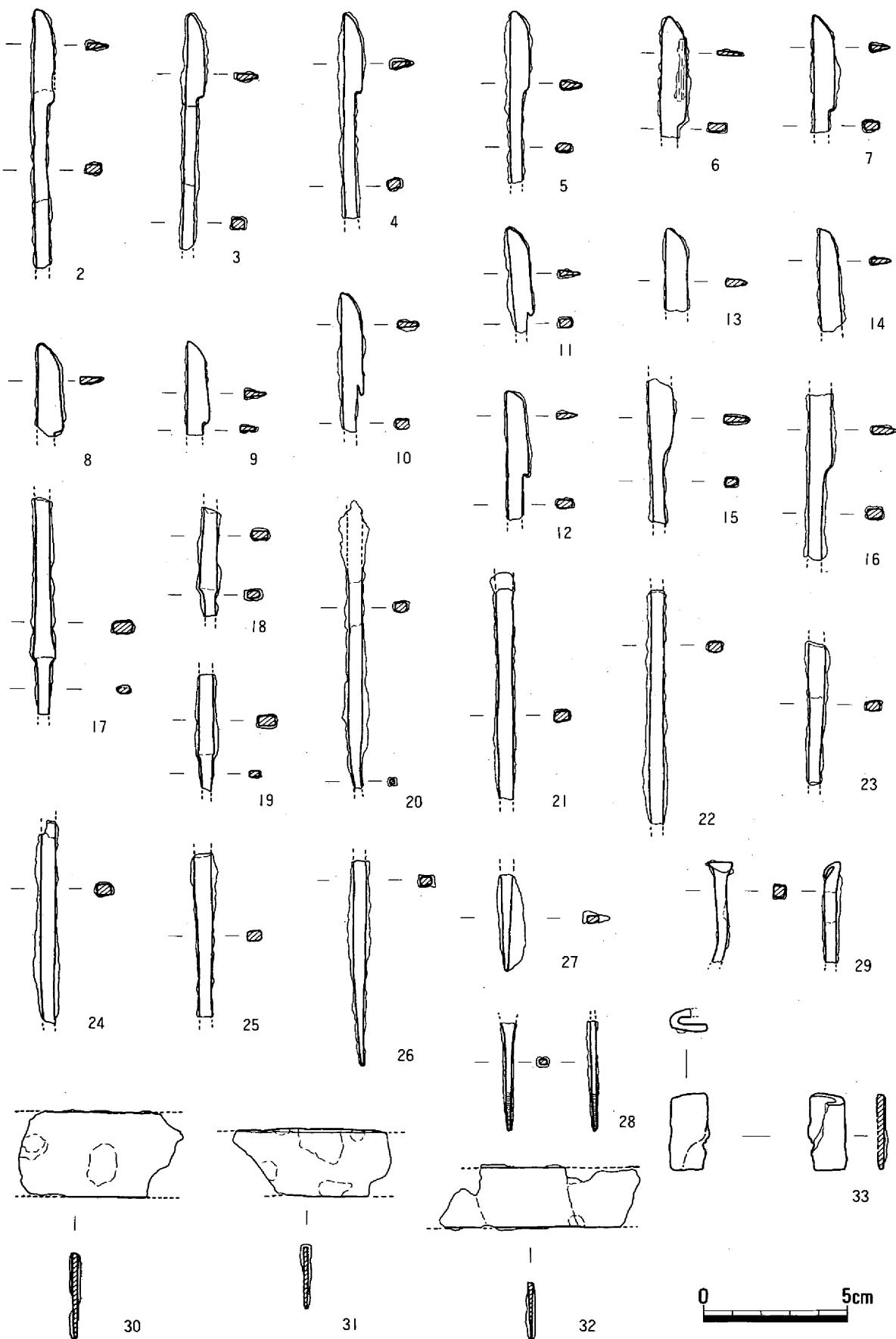
17~19は鎌頭部である。関部はすべて台形に突起する。20~27は鎌の頭部と茎部である。

28・29は小型の釘である。棺東側と頭部付近から出土している。28は頭部を欠くが、先端には横位の木質が認められる。29は頭部を打ちのし、「L」字形に折り曲げて形成している。共に使用目的が判然としないが、釘そのものが小品であることから小型の箱等に用いられたものと考えられる。

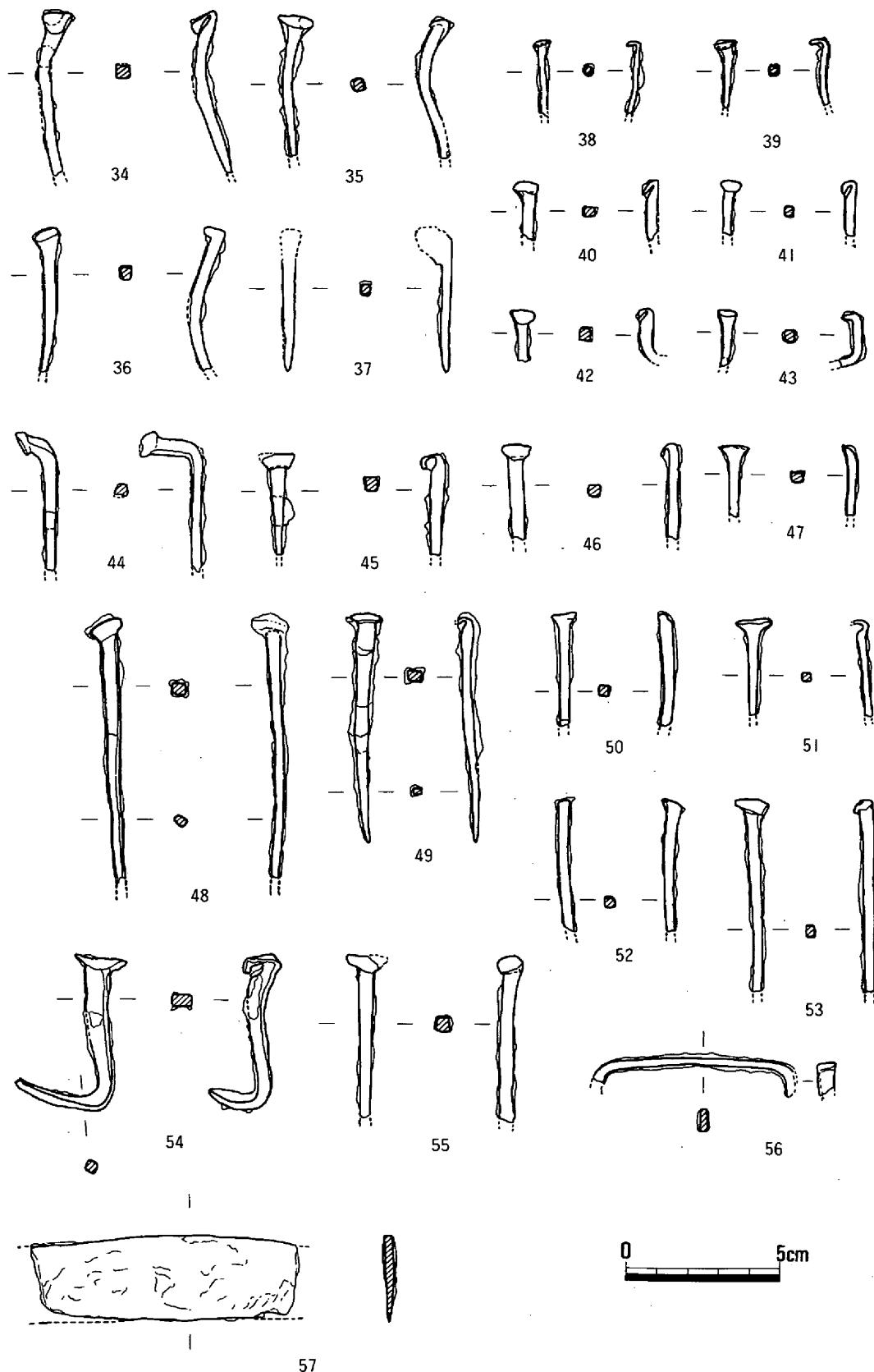
30~33は、用途不明鉄器である。30~32はすべて平片刃造で、表上に近い掘り方東側の中央付近か



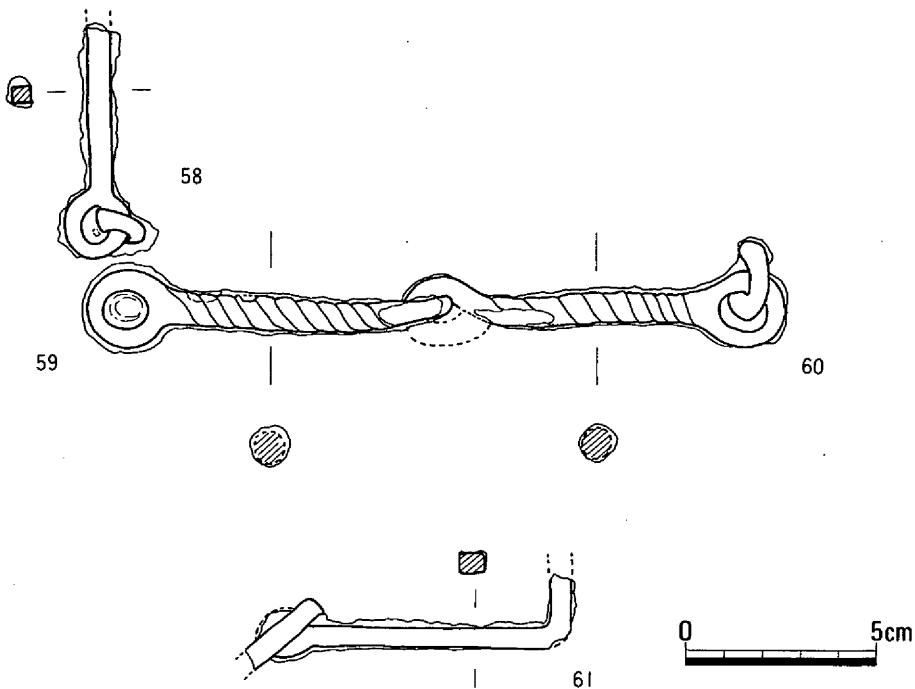
第13図 寺山7号墳主体部内出土鉄器〔1〕(1/4)



第14図 寺山7号墳主体部内出土鉄器〔2〕(1/2)



第15図 寺山7号墳周堀内出土鉄器(1/2)



第16図 寺山7号墳出土馬具(1/2)

ら出土している。平均、現存長43~63mm、最大幅30mm、最大厚4.5mmを測る。鎌もしくは刀子の一部と考えられる。33は現存長27.2mm、最大幅13mm、最大厚8.5mmを測る。鋤先・鎌先などの農耕具の一種と思われる。

周堀内 (第15図、図版12・13)

34~55は釘である。南西側の周堀内から出土している。全体的に小振りなものが多い。しかし48など比較的棺釘となりうるものも出土していることから、棺釘の存在も否定できない。

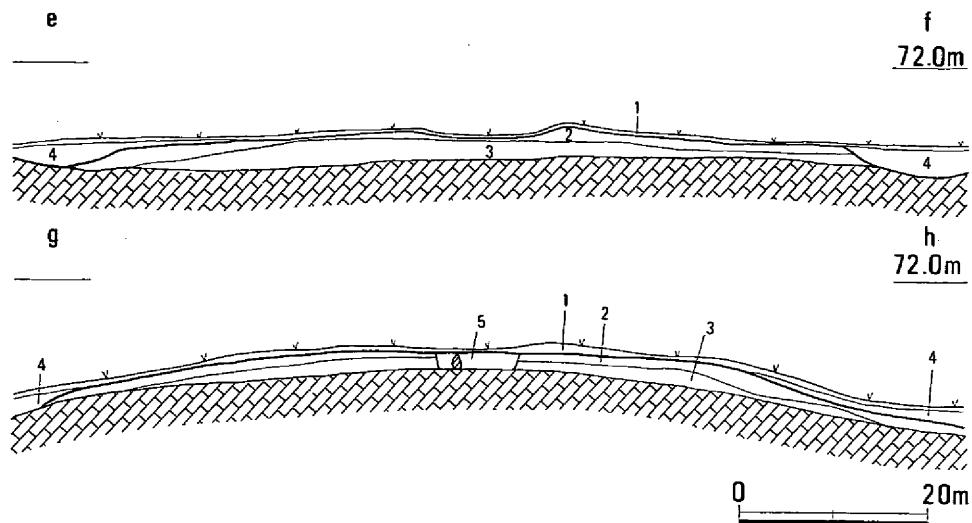
56は鎌である。南西側の周堀内から出土した。断面長方形を呈し、打込み部分と共に欠く。現存長78mm、最大幅8.5mm、最大厚4.5mmを測る。

57は不明鉄器である。8号墳と接する地点から出土した。器表面の剥落が著しいが、先の30~32と同様に鎌もしくは刀子の一部と考えられる。現存長86mm、最大幅20.8mm、最大厚5.4mmを測る。

馬具 (第16図、図版14)

58~60は馬具の轡部分である。すべて主体部の掘り方東側部分の表土付近から出土している。58は引手である。全体的に銹着が著しく、形態の把握が困難ではあったが、現状で観察するかぎりでは直径17mmを測る円形の環から44mmのところから折れており、引手壺の形態は不明である。先端の環には、連結に必要な円形の環の一部が折れた状態で出土している。また59・60の衡部分は中央の脚部分が破損している。60の衡先環の上部には引手に連結する環状の金属片が折れていた。形態としては、衡部分は2個体の断面円形状の鉄棒を10~11回ひねって組み合わせた二連衡である。直径2cmの衡先環から引手につながる部分は、鏡板を介して引手に連結する、いわゆる鎌轡に分類される。

61は馬具の一部分と考えられるもので、南西側の周堀内から出土した。58の引手と同様、断面方形で、円形の環から約6.4cmのびたところではほぼ直角に曲がる。また円形の環には薄い金属片が包み込むように張りついている。



1. 表土 3. 灰黄褐色土 5. 明黄褐色土
2. 暗黄褐色土 4. 黄褐色土

第17図 寺山8号墳 墳丘断面(1/80)

(2) 寺山8号墳

調査前の状況（第4図）

寺山8号墳は、7号墳に西接して立地していた。調査前に現状確認をした時には、全く尾根頂部の平坦な自然地形を思わせ、古墳という認識はできなかった。しかし、平坦面上に不自然な窪みが1ヵ所だったので表土を除去したところ、主体部上部に掘られた盗掘壙と判明した。しかし『岡山市埋蔵文化財分布地図』には記載がないので、「寺山8号墳」として7号墳と一緒に調査に着手した。

墳丘と周堀（第5・18図、図版2-5）

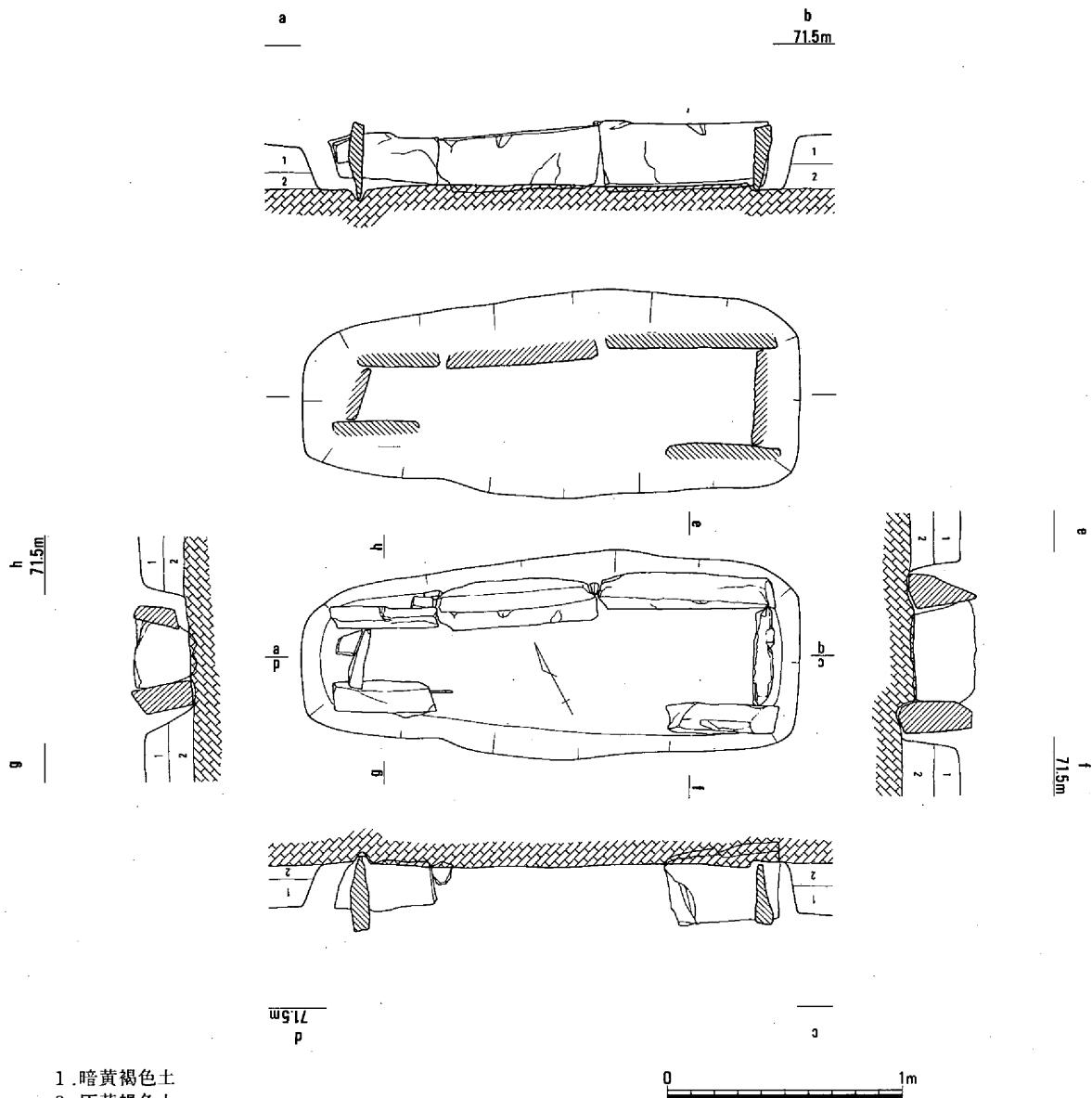
墳丘は7号墳と同様に地山面まで一度掘り下げ、灰黄褐色土と暗黄褐色土を積み上げて築造されていた。石棺を入れるための墓壙は墳丘築造後に盛土を掘り窪めて形成されていた。

周堀は、7号墳とは異なり、尾根頂部と南北の急斜面を除いた緩斜面部分の4ヵ所に認められた。7号墳と接する周堀部分は、断面観察により墳丘と周堀の一部が7号墳によって切られていた。

墳丘・周堀内から遺物は全くみられなかった。もともと副葬がなされなかつたか、もしくは築造当初、副葬されていたがのちに築造された7号墳によって遺物が整理されたのではないかと推定される。

埋葬施設（第19図、図版2-4）

前述のように墳頂部の盗掘壙を精査したときに、表土の直下約20cmのところから箱式石棺を検出した。掘り方の平面形は隅丸方形で、若干石棺より大きめに掘られていた。頭位は東側で、全長206cm、幅80~90cmを測る。箱式石棺はこの掘り方の側部にそれぞれ面取りした石材を入れるために、さらに一段掘り下げられていた。築成はまず東側の薄い小口石を据え、その後北側石を3枚・南側石を3~4枚並べて、足位側にあたる西の小口石を閉じるように据えていた。棺の底部には何も敷かれていなかつた。石棺の内法は、長辺168cm、東小口側42cm・西小口側22cmを測る。主軸はS 30°Eである。使用されている石材は、この付近で多く産する流紋岩である。断面観察によると、盗掘壙は棺底部には到つていなかつたが、副葬遺物は出土しなかつた。付近には割られた石が散乱していたことから盗掘壙は南側石を抜き取るためのものと考えられる。



第18図 寺山8号墳 主体部(1/30)

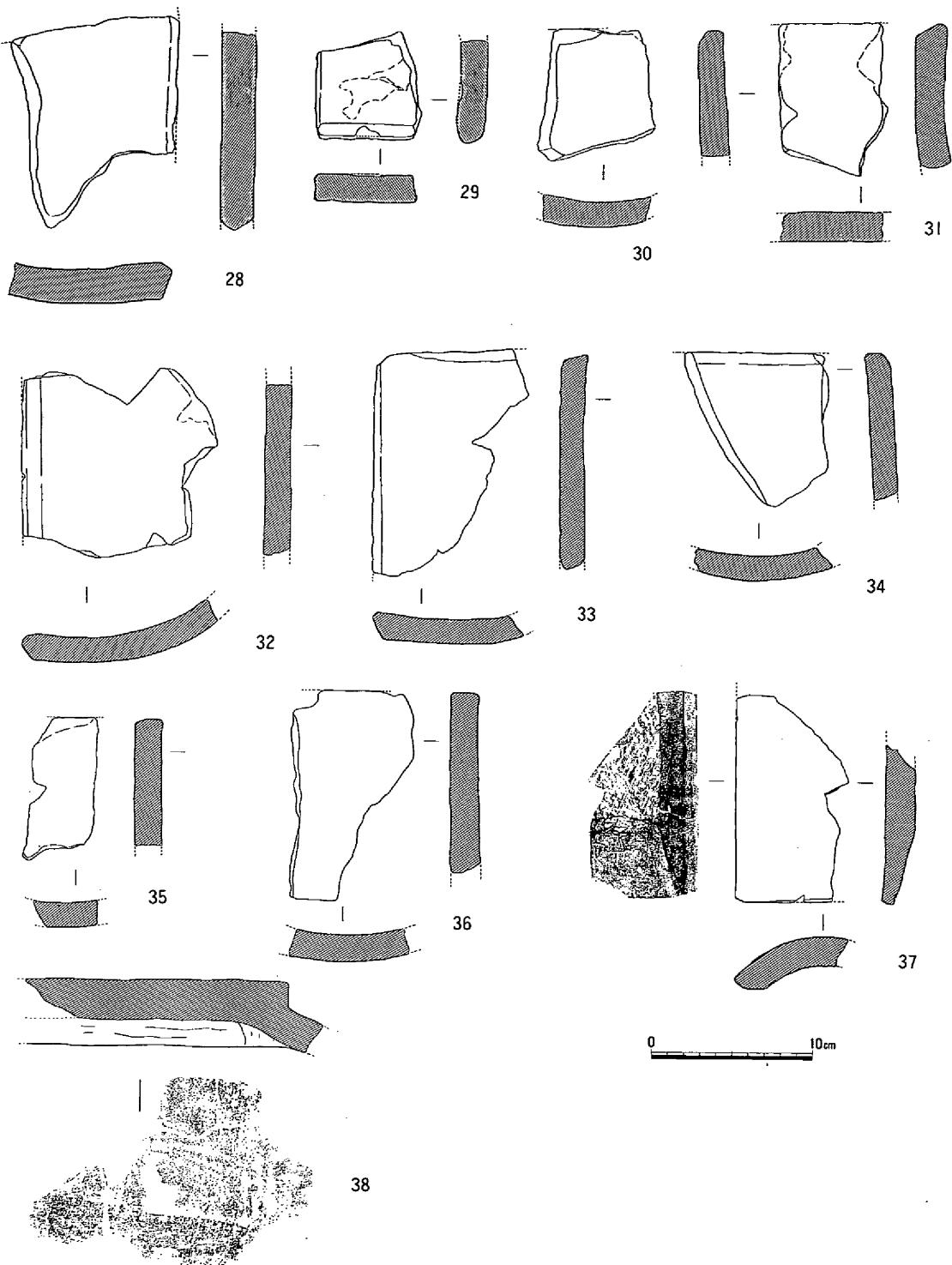
(3) 遺構に伴わない遺物

瓦片 (第4、20図)

調査を開始した際に、7号墳の墳丘付近の表土の中から多くの瓦片が出土した。全体的に器表面の摩滅が著しく、完形となったものはなかった。全部で平瓦が10点、丸瓦が1点出土している。

平瓦の28・29は両面共にナデ調整し、断面はあまり屈曲しない。広端部の一部と狭端部を欠く。28は全体的に残存状況はよい。凹面側縁をわずかに面取りする。色調は28が灰白色、29が浅黄色である。30は両面に離砂が認められ、端面のヘラ切りと凹面側縁が面取りされている。色調は浅黄色である。31~36の凹面はナデ調整、凸面は離砂、未調整である。側面ヘラ削り、凹面側縁を面取りする。色調は31・32が灰白色、33がにぶい黄橙色、34が灰色である。

37と38は丸瓦である。37の凸面がナデ、凹面は布目痕を残し、玉縁面・側縁をナデによって調整している。また凹面の胴部側縁は面取りされている。この瓦がいかなる種類か浅学のため不明であるが、熨斗瓦の可能性も考慮の範囲に入れたい。色調は明オリーブ灰色である。38は一般的な丸瓦である。



第19図 寺山7号墳付近表土出土瓦(1/4)

残存状況はきわめて悪い。凸面の調整は不明、凹面は縄目痕と棒状工具による内叩き痕を残す。色調は、にぶい黄橙色である。地元民による聞き取り調査によると、当該地域は小字名で「薬師堂」と称するとのことで、この地点に堂宇が建立されていたことは十分に推察される。時期は出土した多くの瓦の器表面が著しく摩滅しているために不明ではあるが、残存状況が比較的良好な37、38の凹面に施されているコビキ法から考えて、安土桃山時代ごろが想定できよう。

(4) 寺山9号墳

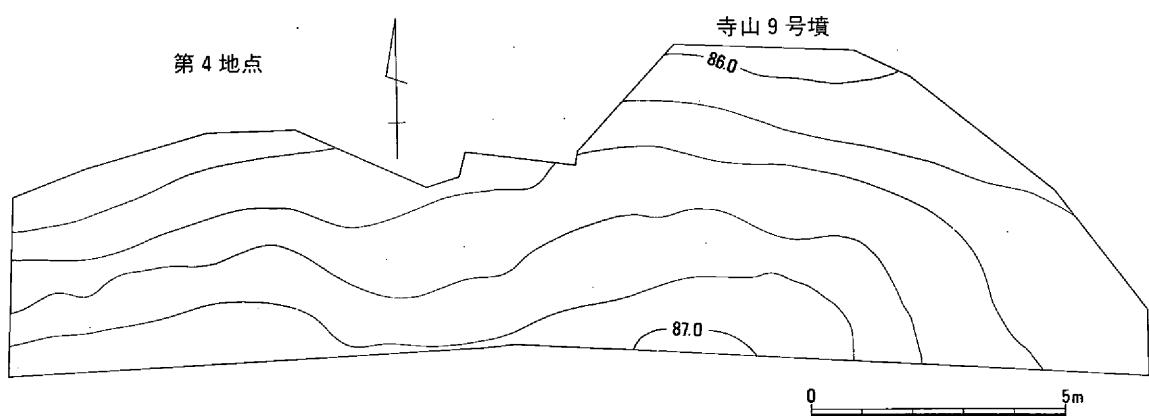
調査前の状況 (第20図)

寺山9号墳の発見は偶然によるものであった。寺山7号墳・8号墳の調査を終えて、大日幡山の東側にのびる支丘の頂上部に位置する大日幡山城の出丸跡まで調査機材を運ぶ時に山道部分で、周りの平坦な地形に比べて不自然に盛り上がった地点が見受けられた。しかし現地は当初の調査範囲に入っておらず、立木の伐採がなされていなかったために周辺の詳細な遺跡の確認作業ができなかつた。その後調査依頼者を通じて用地内の立木の全面伐採を依頼し、終了後改めて周辺を見てみると、古墳状の地形が2ヶ所並んだ状態で認められた。その後東側を「寺山9号墳」、西側を「寺山10号墳」として新たに調査範囲を設定し、調査に着手した。

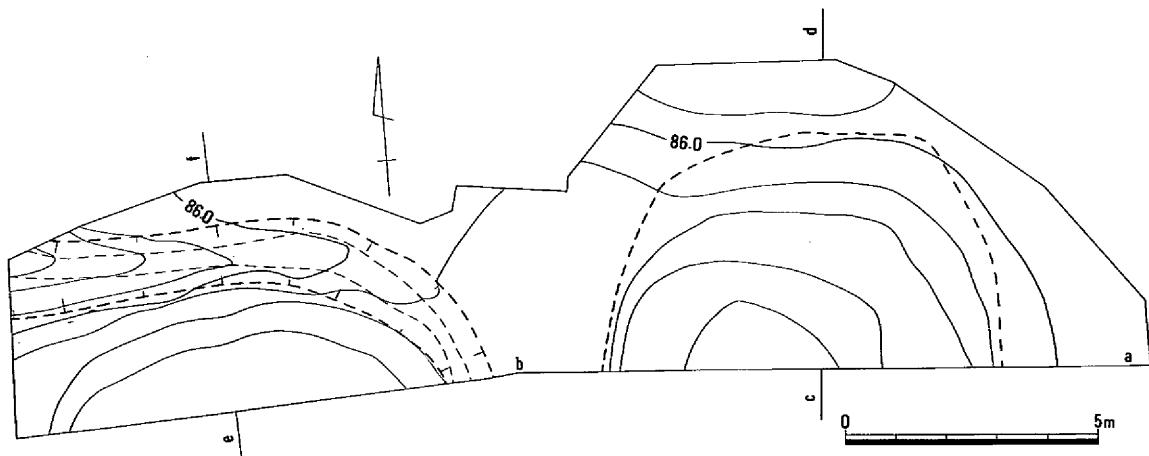
しかし「寺山10号墳」とした地点は、調査の過程で南側にのびる枝尾根へ登ってゆく古道の跡と判明した。古道跡については後節の「第4地点」において詳述する。

墳丘と溝 (第21図、図版2-6)

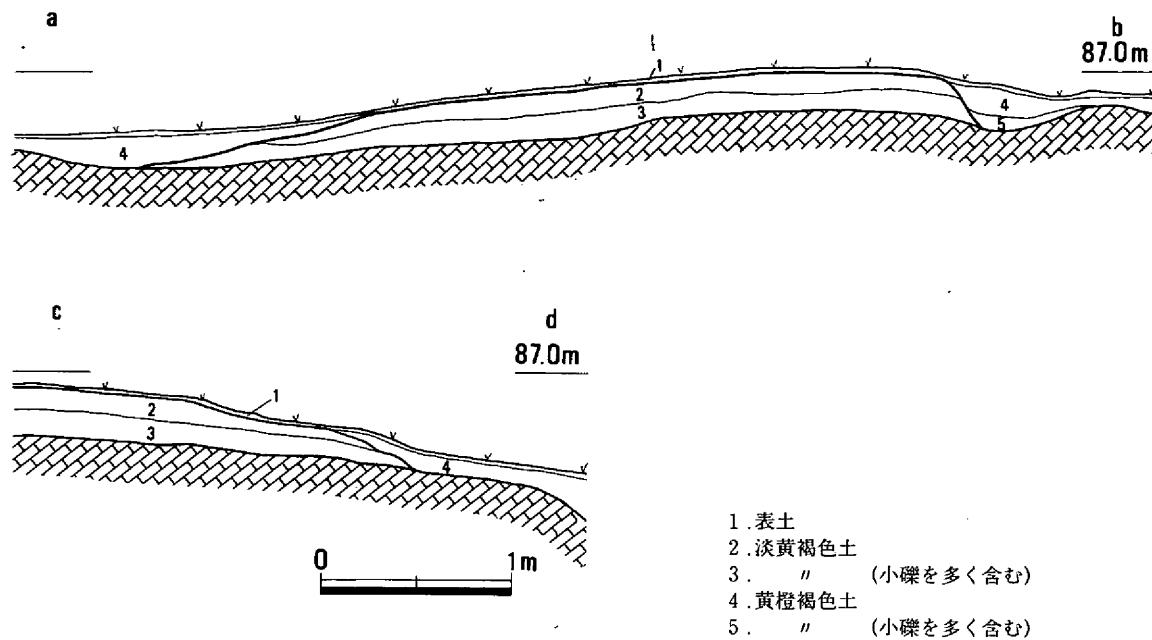
まず調査は、調査区境に沿って南側にトレンチを設定することから開始した。このトレンチによつて土層の断面観察を行い、遺構の範囲を確認したところ、調査区東端部分から弥生土器片が多数出土した。また南北方向にもトレンチを設定して、遺構の範囲が谷へ落ち込んでゆく約1m手前まで広がることを確認した。結果、東西方向に約4.5m、南北方向に推定約5mを測り、墳形としてはほぼ方形



第20図 寺山9号墳・第4地点 調査前地形測量図(1/150)



第21図 寺山9号墳・第4地点 調査後地形測量図(1/150)



第22図 寺山9号墳 土層断面(1/40)

の形態を呈するものと思われる。調査は墳端東側の弥生土器が出土した地点から徐々に表土を除去して墳端部分を確認する作業を行なったが、調査区内では周堀は検出できなかった。このことは地形が調査区北側で谷へ急激に落ち込み、なおかつ南側が枝尾根の鞍部となることから見て、周堀は尾根を断ち切るようにコの字状に掘られているものと推定される。

溝は前述のように東西の端部でのみ確認され地山面を若干削りだして形成されていた。規模は幅約0.6m、深さ約0.3mを測る。

埋葬施設（第22図）

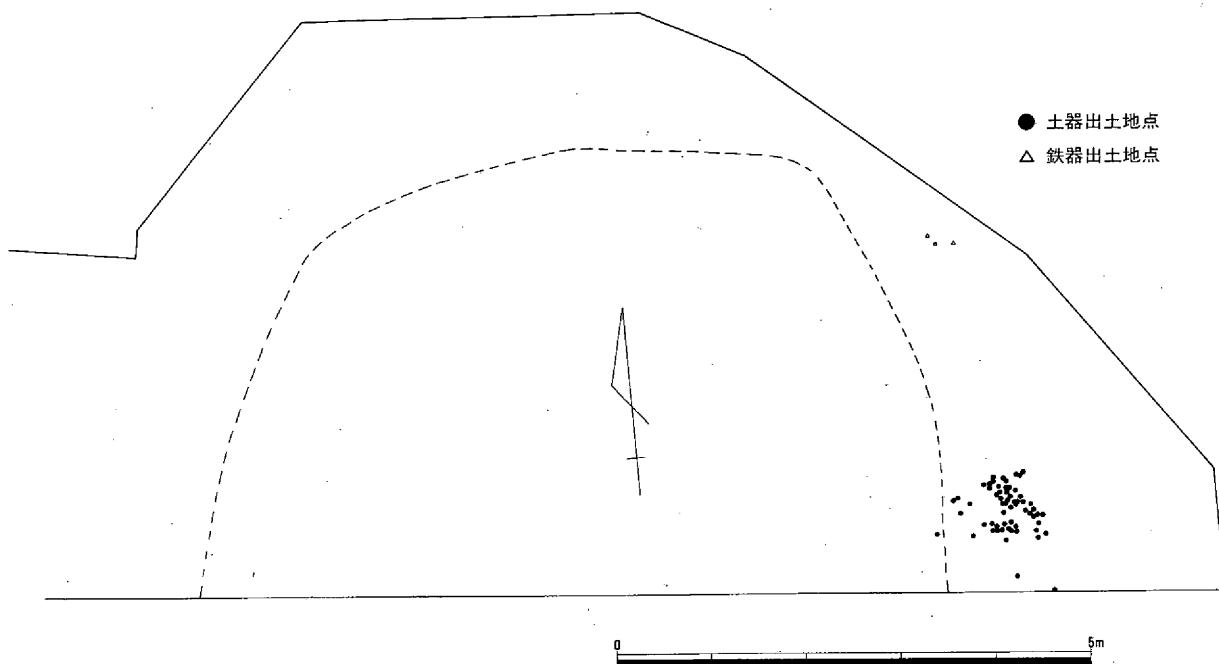
調査地点にかかった墳丘部分に計4本のトレンチを設定して主体部の確認を行なった。しかし地山面まで掘り下げたが埋葬施設と思われるものは確認されなかった。このことから主体部は用地外に立地しているものと考えられる。

遺物出土状況・出土遺物（第23・24図）

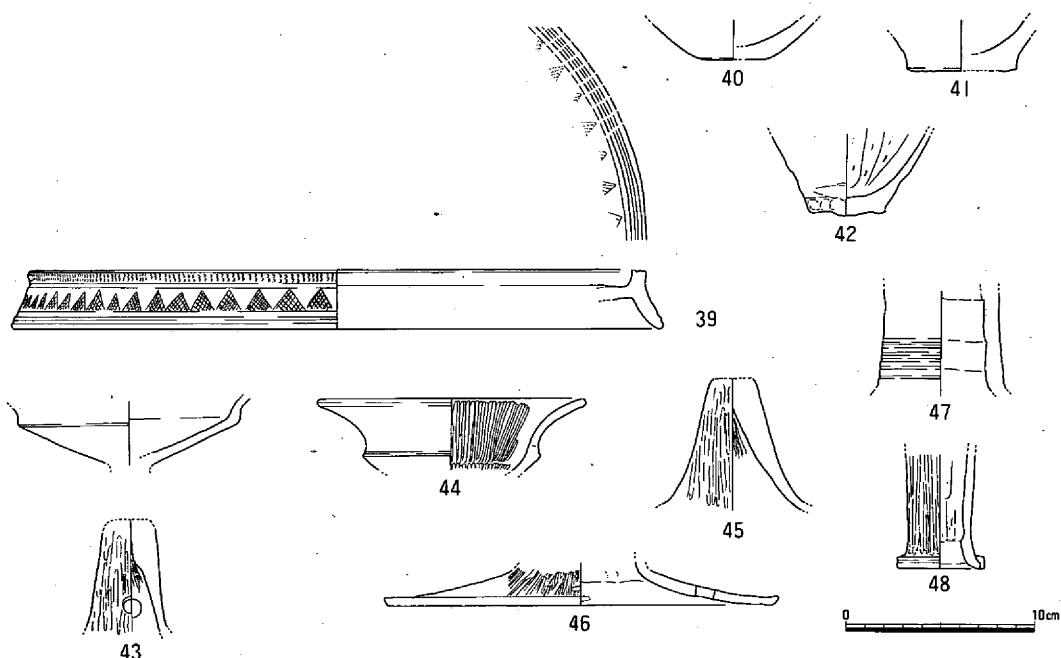
前述のように遺物は、東側用地境の溝付近から主に出土した。遺物はすべて弥生土器の小破片で、復元できたものを図示した。

39は大型装飾高杯の口縁部分である。口縁の端部が上下に大きく拡張され、外面には半裁竹管文とヘラ描きによる鋸歯文が巡っている。内面には上面にヘラ描きによる鋸歯文が巡っていたものと考えられる。調整としては全体にヨコナデが施されている。口径は復元推定で約313mmを測る。焼成は良好でふい橙色を呈する。口縁端部の約1/8が残存している。類例としては倉敷市上東遺跡の東鬼川市調査区の溝2から出土したものがあげられる。

40～42は甕の底部である。40の外面には縦方向のヘラミガキが不明瞭ながら観察され、内面と底面はナデが施されている。また外面には黒斑が認められる。底径は復元推定で約32mmを測る。焼成は良好で色調は浅黄橙色を呈する。器底部の約1/5が残存している。41は全体的にはナデ調整を行い、器底面では端部を摘み出して厚みをもたせるようにしている。また外面には焼成時の黒斑が残っており、器底面は未調整である。底径は復元推定で約58mmを測る。前述の40同様に焼成は良好で浅黄橙色を呈



第23図 寺山9号墳 遺物出土状況(1/80)



第24図 寺山9号墳 出土遺物(1/4)

する。底部の約1/3が残存している。42の外面はナデによる調整の後に底部の端部を指で摘んで、わざと指頭痕を残している。底面も外面に引きだされた端部のために中心部分を残して、えぐれたようになっている。このために底面はひどく不安定である。また端部の直上には部分的に平たい板状の工具のようなものをあてた痕跡が数ヶ所認められる。外面の約2/3には黒斑が認められる。内面調整としては縦方向のヘラケズリが施されている。底径は40mmで焼成は良好である。色調は黄橙色を呈している。

43～47は高杯である。43は杯部と脚部に別れている。杯部は皿部のみで口縁部を欠くため全体像が不明ではあるが、形態からみて上方に湾曲しながら外方向へ立ち上がり、端部は丸くなるものと考えられる。調整としては器表面が摩滅していて不明瞭ながら、杯部・脚柱部の内外面に縦方向のヘラミガキが施されていることが確認できる。脚部は柱状部分のみ残存していて裾部を欠く。調整としては、脚柱部の内面に絞り目が認められる。また脚柱部には円孔が左右両方に穿たれている。杯部の最大径は115mmで、脚柱部の現存長は58mmを測る。焼成は良好で、色調としてはにぶい橙色を呈する。全体の形態としては杯部と脚部が別造りで、後に杯部に脚部を挿入する「差し込み法」といわれるものである。44は口縁端部である。皿部から口縁端部にかけての部分が残存しており、端部は丸くなっている。内外面ともに縦方向のヘラミガキが施され、皿部と端部の接合点にはヘラによる沈線が1条認められる。前述の43と同種のものと考えられる。また外面にはわずかではあるが、朱が認められた。45は脚部である。残存状況は柱状部分の半分のみで、杯部の全体と裾部を欠く。43の脚部と同じく別造りとなる「差し込み法」といわれるものである。内外面ともに器表面が摩滅しているために調整は不明であるが、わずかに外面に縦方向のヘラミガキ、内面に絞り目が認められる。残存長は約70mmである。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈している。46は裾部である。裾部全体の約1/2が残存している。外面は縦方向のハケによる調整の後にヘラミガキが施されている。脚柱部から続く屈曲部から緩やかに外方向に広がり、裾端部は指によって上方につまみあげられている。内面はハケ状の工具によるナデが施されており、屈曲部にはナデと板状工具をあてた痕跡が部分的に認められる。中央部分に円孔が1つ配されている。底部の径は復元推定で204mmを測る。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈している。47は脚柱部である。全体的に器表面の摩減が著しいが、わずかに外面には縦方向のハケメ調整後に下半にヘラによる6条の沈線を巡らせてていることが認められた。内面は全体に絞りの後にナデによる調整が行なわれ、断面からは粘土紐の巻き上げ痕が認められる。最大径は復元推定で約57mmを測り、かなりの大型高杯の脚部と考えられる。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈している。

48は細頸壺の頸部の付け根部分である。比較的に残存状況は良い。外面調整は、縦方向のヘラミガキが行なわれており、部分的に朱の付着が認められた。口縁部はラッパ状に開くものと考えられる。形態としては頸部の側に胴部と接合するために端部を「ハの字」に屈曲させて胴部に密着させ、頸部と胴部を接合する部分には、接合がスムーズにできるよう粘土紐を貼りつけて突帯状にして巡らせていた。突帯の上部にはヘラによる刻み痕や沈線が全体的に巡っている。内面の上部には工具によるナデが、また付け根部分には不定方向のナデが施されている。現存長は約61mmを測る。現存する頸部の最大径は約36mmを測り、突帯部分は最大径46mmを測る。焼成は良好で、色調は橙色を呈している。

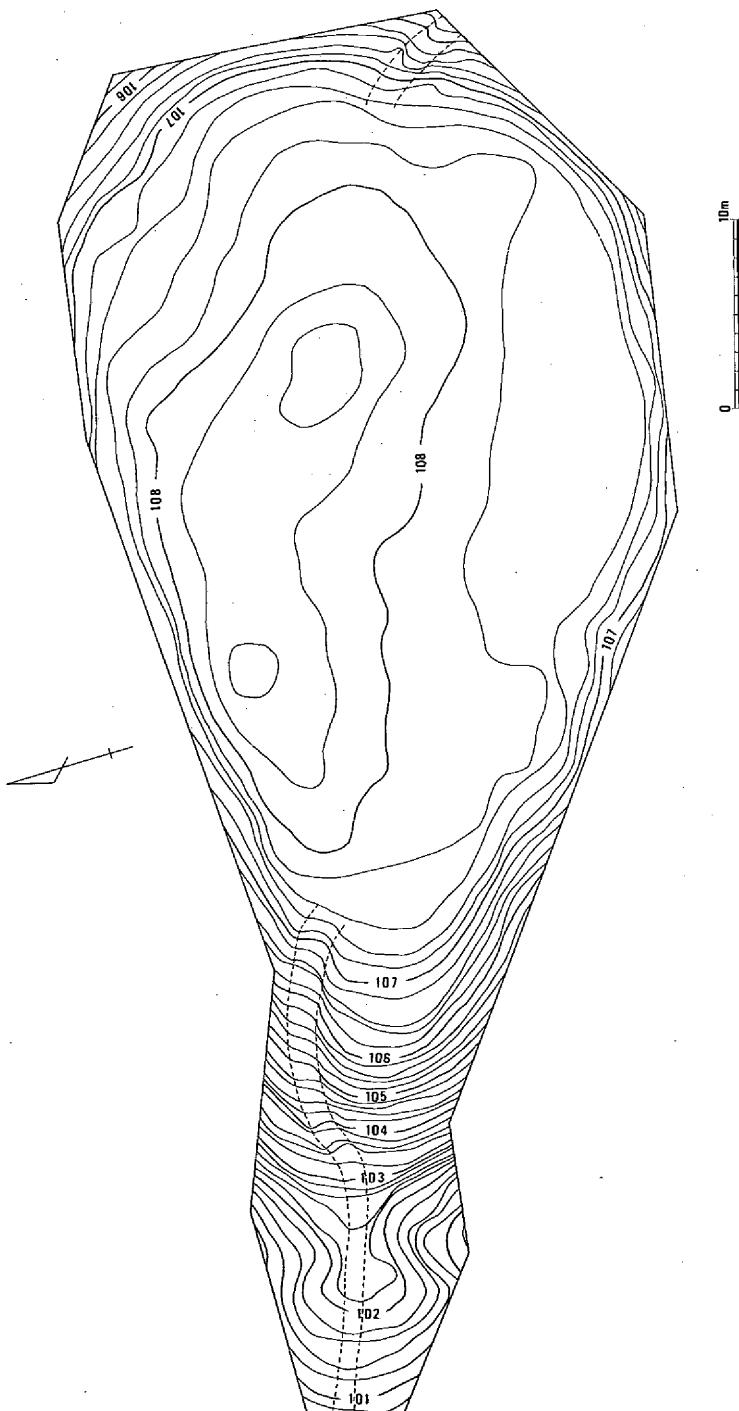
これらの土器は、弥生時代後期の中頃、上東編年では鬼川市II～III式の中間期に相当し、高橋編年ではVIII-b形式にあたる。

その他、直接的に遺構とは関係はないが、寺山9号墳の北東部分から釘2点、板状製品1点の計3点の鉄製品が出土している。いずれも後世のもので、山頂の大日幡山城に関連するものではなかろうかと考えられる。

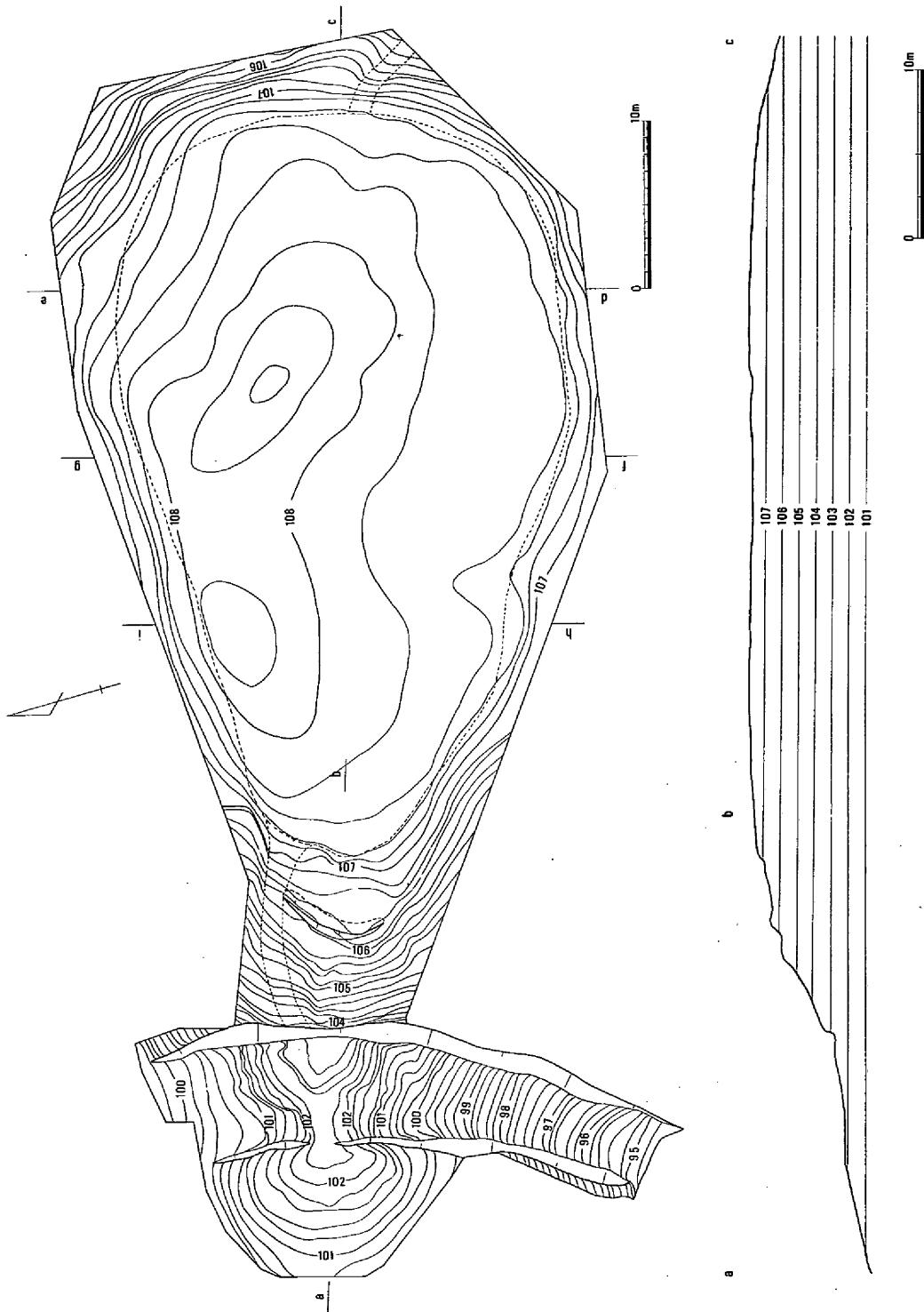
第2節 大日幡山城 出丸跡の遺構と遺物

1) 大日幡山城の概要

大日幡山城は、吉井川下流域の岡山市樫原・内ヶ原・寺山にまたがった独立丘陵である大日幡山の山頂部分に位置する。城は東から南側に吉井川と千町平野を見下ろし、北側と西側は山陽道を見渡せ



第25図 出丸跡 調査前地形測量図(1/400)

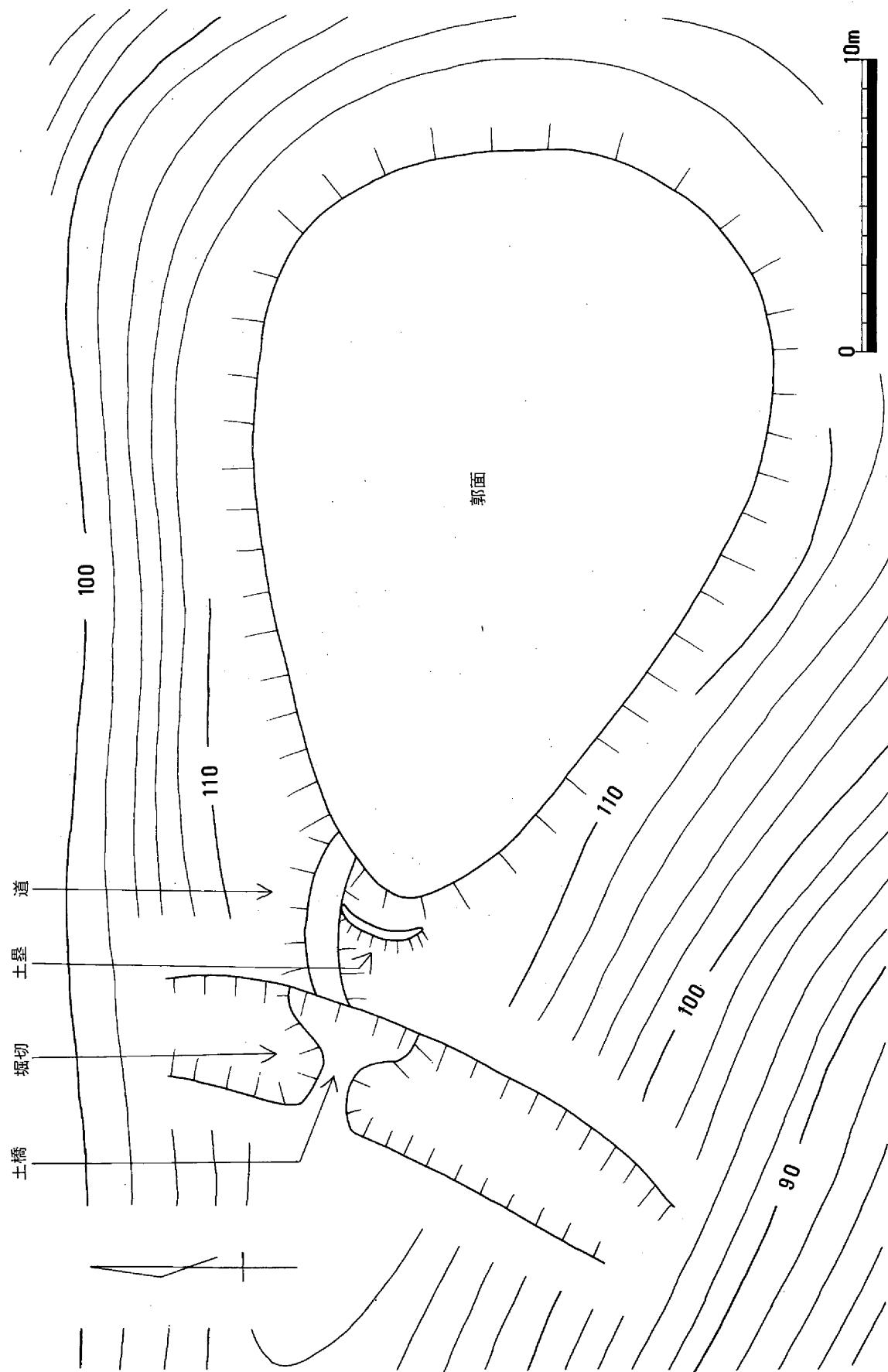


第26図 出丸跡 調査後地形測量図および東西断面(1/400)

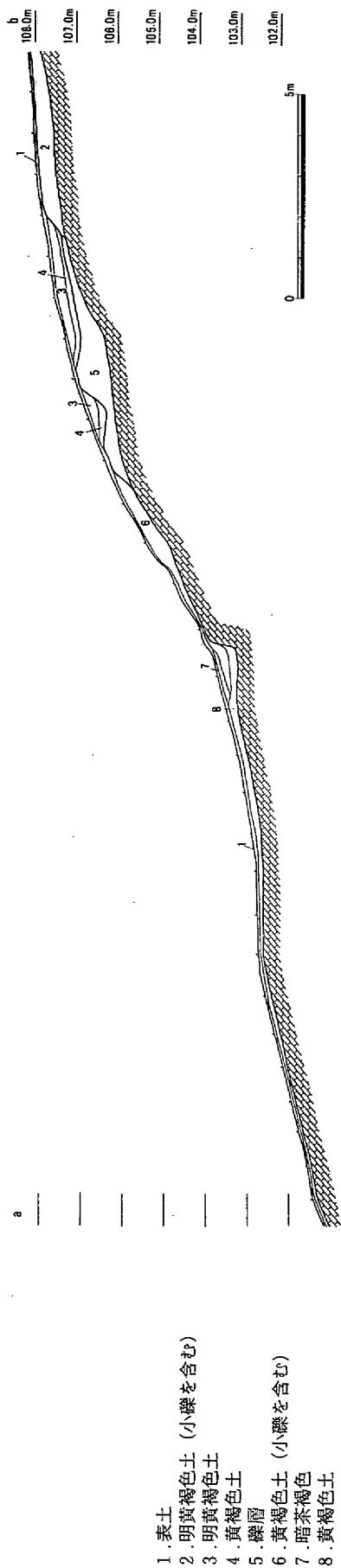
る位置にある。当該地区は備前国の中でも陸上・水運交通の要衝の地であり、戦略上重要な場所であるといえる。

築城時期や沿革は不明であるが、文明15（1483）年の福岡合戦の時に備後国の山名俊豊が本陣を置いており、また戦国時代後半期には島村觀阿弥が在城していた、と史料には記されている。

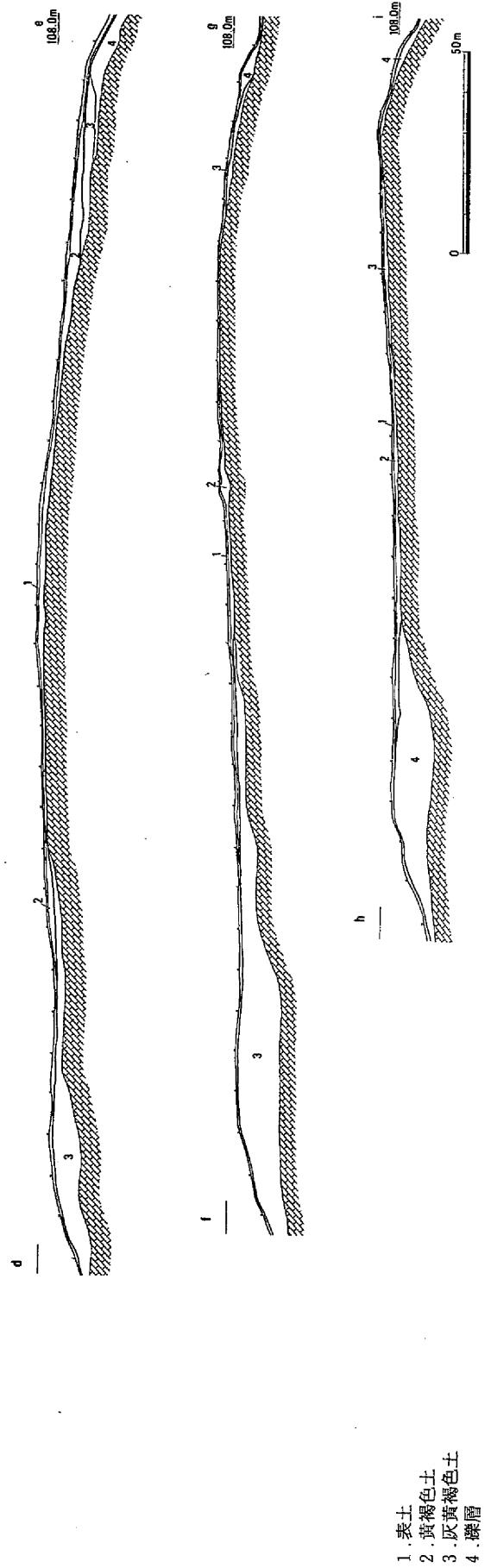
また遺構については、未だ発掘調査が行なわれていないことや曲輪の測量等も行なわれていないことから城としての実態は不明である。



第27図 出丸跡 繩張(1/500)



第28図 出丸跡 郡面から下がり部分土層断面(1/160)

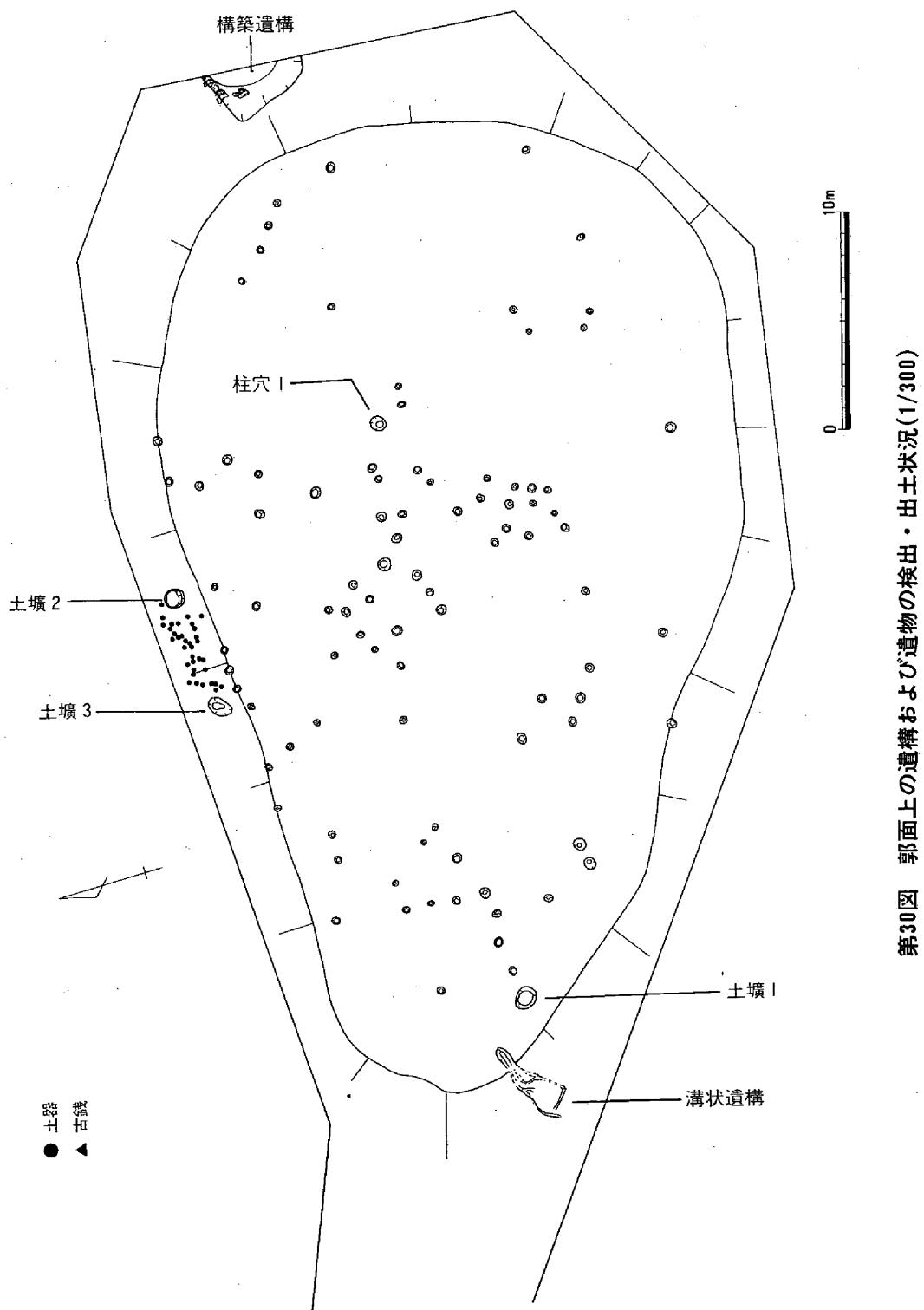


第29図 出丸跡 南北断面(1/160)

2) 調査の概要

出丸跡の調査は1780m²を対象面積として実施した。全面調査に入った4月当初、保安林の解除申請のために用地内の立木伐採が遅れ、全容を知ることができなかつた。しかし伐採終了後には、東側の急斜面を登り切った海拔108mの地点に約800m²ほどの面積を有する平坦面（郭面）が広がっていることが判明した。出城跡の立地について見てみると、道が認められた西斜面以外はすべて急斜面となつており、容易に近付くことができない状況であった。

当初、山林が保安林の指定を受けていたことから郭面上には比較的遺構・遺物が良好に残っている



第30図 郭面上の遺構および遺物の検出・出土状況(1/300)

と予想され、これら遺構・遺物の有無を確認するために東西方向にトレーナーを設定して調査を開始した。しかし予想に反して遺構と遺物はわずかしか確認されず、結果として出丸跡の遺構は大きく分ければ、郭面と背後の堀切、郭面と堀切の中間斜面上に位置する小規模な土壙から構成されていることが判明した。

(1) 郭面上の遺構と遺物

大日幡山城の出丸跡の遺構は、前述のように支丘頂部の郭面と背後の搦手側に掘られた堀切によって構成されている。

郭面は東西約45m、南北約27mのほぼ卵形の形態を呈する。現地表面を除去すると、もっとも高くなる中央部分ではすぐに岩盤が認められ、郭面の端部付近では岩盤上に黄褐色の盛土と碎石による平坦な人工造成面が形成されていた。郭面から見た傾斜は、西側以外は急斜面である。遺構は郭面全体に散在する柱穴群と土壙群である。

柱穴 1 (第30・35図、図版3-9)

郭面中央部分からやや東側から検出された遺構である。平面はほぼ円形状を呈し、径約140cm、検出面からの深さは約90cmを測る。掘り方は上方に向かって開くU字形で、郭面上のどの柱穴よりも深く安定しており、底面は平坦である。中心部分には柱痕跡が認められた。

出土遺物は、底面付近から出土した鉄製の釘が1点のみである。1は小型のもので、断面正方形を呈する。現存長37mm、最大幅4.1mm、最大厚2.5mmを測る。頭部は打ちのばして、「L」字状に折り曲げて形成されている。胴部には錆膨れによって先端部分が剥離している。

土壙 1 (第31・35図、図版4-10)

郭面の西端部分から検出された遺構である。規模は、長径約210cm、短径約170cmを測る楕円形状の土壙である。深さは、検出面より約40cmで、掘り方が浅い鉢状に肩部が緩やかに下がり、底面はやや丸みをもった平面である。埋土は、黒灰褐色土の1層だけである。

遺物は、全く認められなかった。

土壙 2 (第32図、図版4-11)

郭面中央部分の北側斜面から土壙3とともに検出された遺構である。本来ならば、郭面以外の遺構として記すべきものではあるが、郭面端部の盛土が流出したために、郭面外になっていると考えられるので、ここでは郭面上の遺構として記しておく。

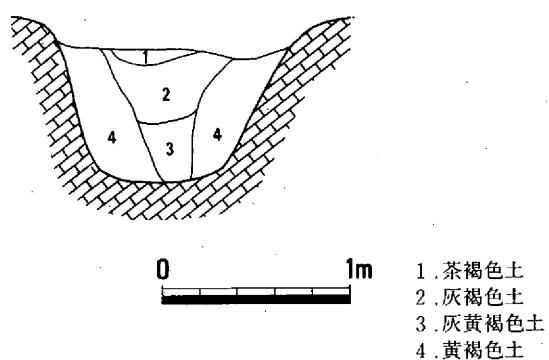
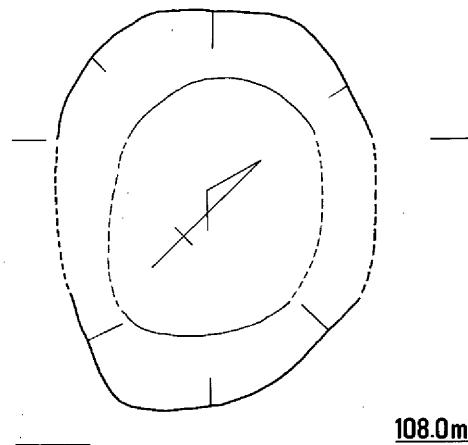
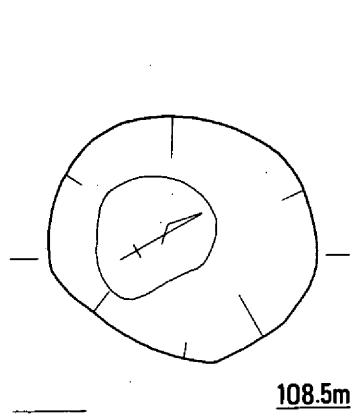
規模は、約180cmのほぼ円形に近い土壙である。深さは、検出面から深いところでは約80cm、浅いところでは約30cmを測る円形の土壙である。埋土は、茶褐色土の1層のみである。

遺物は、鉄器が2点(2・3)出土している。ともに釘である。2は断面長方形を呈し、頭部の一部と先端部分を欠く。現存長は35.9mm、最大幅8.8mm、最大厚9.9mmを測る。頭部は打ちのばして折り曲げている。3は断面がほぼ正方形を呈しており、先端部分を欠く。最大長は26mm、最大幅3mm、最大厚4mmを測る。頭部は撥型に開き、丁寧に打ちのばして「L」字状に形成されている。先端部分を欠き、胴部途中で折り曲がっている。

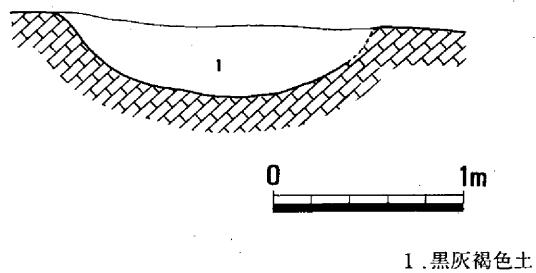
土壙 3 (第33図、図版4-12)

土壙2の西側約7mの地点から検出された遺構である。規模は、長径約230cm、短径約160cmを測る不整楕円形状の土壙である。深さは最大120cm、最小50cmを測る。

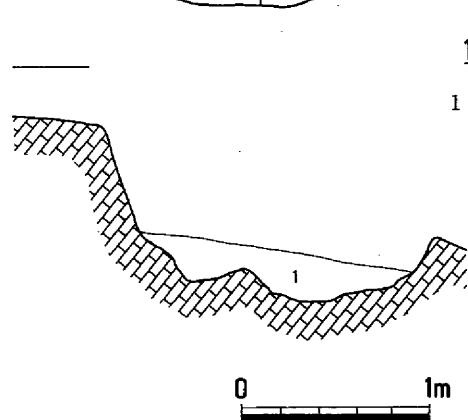
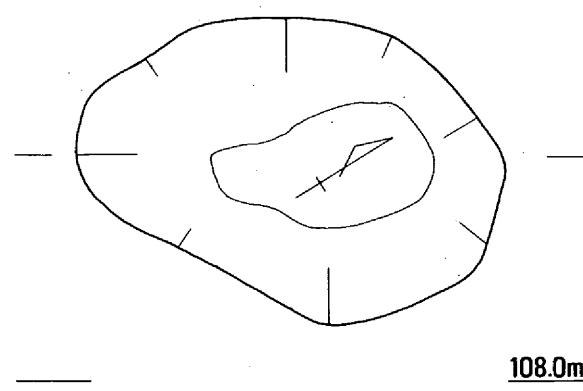
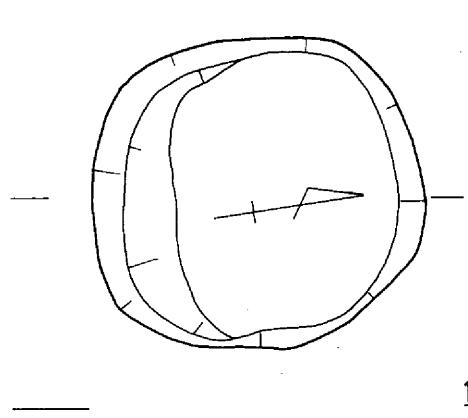
遺物は全く出土しなかった。



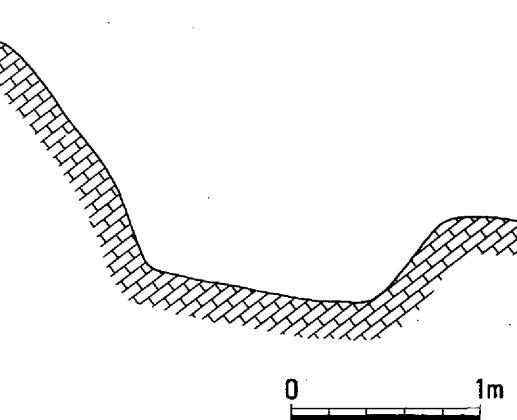
第31図 柱穴1 平面・断面(1/40)



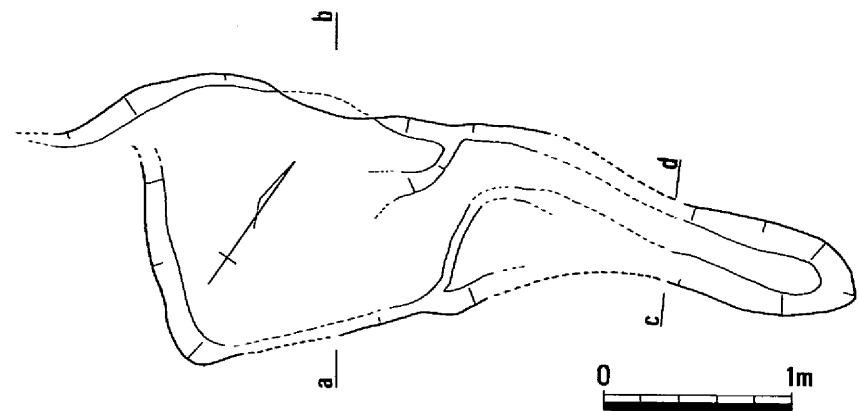
第32図 土壌1 平面・断面(1/40)



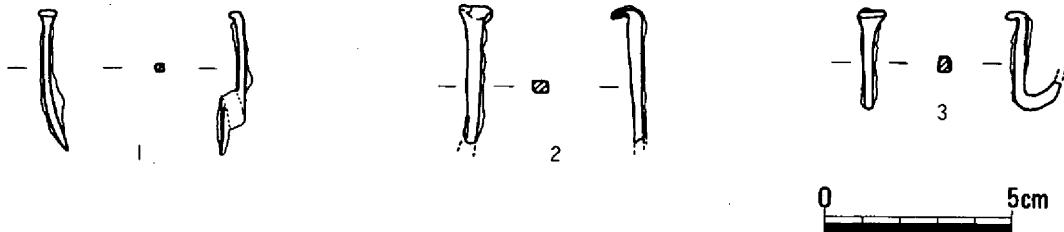
第33図 土壌2 平面・断面(1/40)



第34図 土壌3 平面・断面(1/40)



第35図 溝状遺構 平面・断面(1/40)



第36図 柱穴1・土壙2 出土鉄器(1/2)

溝状遺構 (第34図、図版5-13)

郭面南西端、虎口から約5mの地点から検出された遺構である。郭面から斜面にかけて流れ落ちるように下方ほどラッパ状に広がっている。規模は検出面から郭面上部分では約10cm、斜面部分では深いところで約30cm、平均約20cmを測る。

断面は郭面上では浅い皿状で、斜面部分ではほぼ垂直に掘り窪めて一部深くした形態を呈していた。底面は郭面部分ではやや丸みがあり、斜面部分では平坦な部分と丸みのある部分が認められる。埋土は郭面を形成していた黄褐色土で埋没しており、廃城後に埋没したことが推察できる。

遺構の性格は不明で、周辺には付随する遺構は認められなかった。

遺物は全く出土しなかった。

その他、郭面上からは多くの柱穴群を検出した。しかし全く遺物は認められず、掘り下げても約10cm程度で岩盤面にあたるために、その遺構としての存在すら疑われるものである。しかし、後述する郭面以外から出土した遺物の中には鉄製の釘があることから、郭面上には建物や柵を含むその他の構築物が立地していたことは十分に考えられる。

また東側と西側の各斜面には道が現状で認められるが、郭面上には道に対応する虎口の門等の遺構は検出されなかった。同じく郭面を巡る柵も見られなかった。

(2) 郭面以外から検出された遺構と遺物

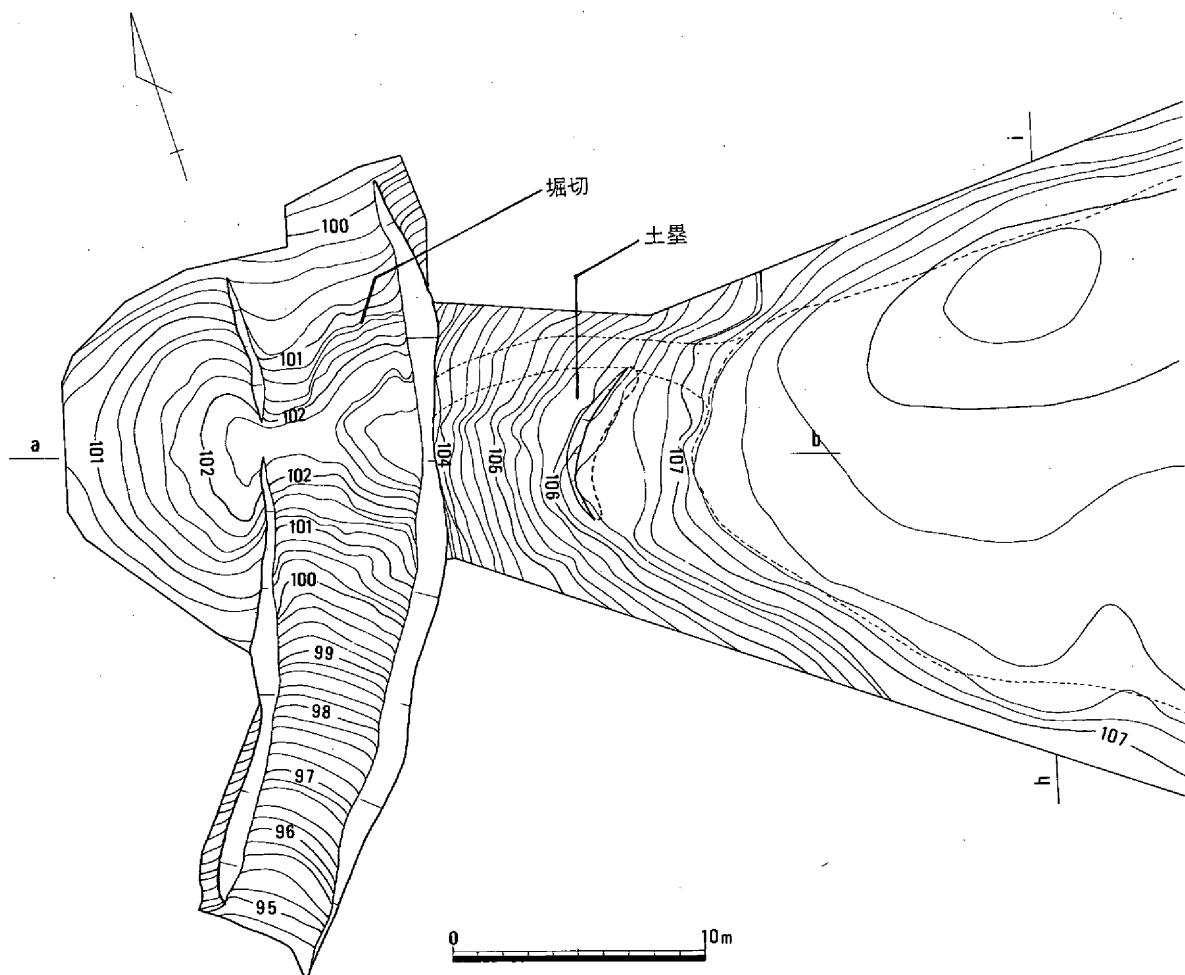
郭面以外で検出された遺構は、郭面西側に掘られた堀切と郭面から堀切に下りてゆく中間部分に位置する土壘、郭面の北東斜面上に検出された構築遺構がある。

堀切（第36図、図版5-14・15）

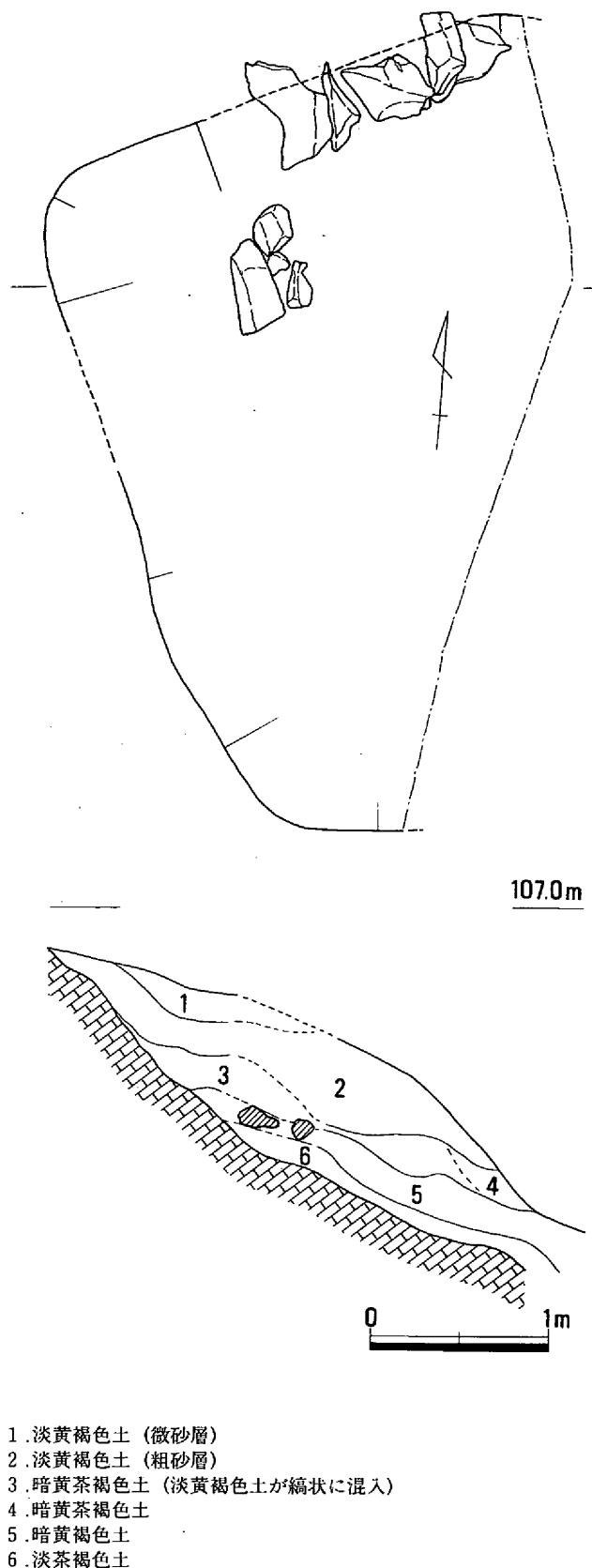
主郭の西端から直線距離で約10mの地点で検出された遺構である。その形態は郭面から西斜面をおさえた細い尾根の頂部から直線距離で北側は最大約10m、南側は約20mと南側が長く掘り溝められている。全体的に東方向に緩やかな弧を描いている。

その断面は幅が最も広くなる北端で約7m、最も狭くなる南端部分では約5mを測る。形態としては尾根の頂上部、すなわち郭面から下りてくる道がいたる東側の地点では、切岸状に垂直に岩盤が切り取られて底面が平面になる箱掘状の形状を呈しており、西側は土橋状に地面が掘開されずに残されていた。

これらの調査結果から搦手側の防備という観点から、とうてい攻撃側の流入を免れないようと思われるが、郭面から下りてくる道が幅2m弱と狭く、後述する土壘とあわせて一度に多くの攻撃方が本丸に入り込めないような遺構の配置になっているものと考えられる。



第37図 堀切・土壘 平面(1/300)



第38図 構築遺構 平面・断面(1/40)

土壘 (第36図、図版5-15)

郭面の西端、虎口部分から約1m下がった地点に検出された遺構である。現状では全く確認できなかったものである。幅約1m、全長約5.5mを測り、弓形の形状を呈するものである。

断面を観察すると、地山面に拳大の碎石が約80cmほど直接盛り上げられていた。土壘の北端は、削りだして形成されている道部分に接していた。構築の過程としては頂部の郭面を築造後に道の部分とあわせて、一度削りだして形成されていたことがわかった。

しかし搦手側に土壘を築くことに疑問を抱くものであるが、土壘を築くことによって斜面を広がって駆け下りようとする攻撃側を道部分に集中させて、攻撃力を縮小させるためのものではなかったかと推察される。

構築遺構

(第37図、図版6-16・17)

郭面から急斜に下がってゆく北東斜面から検出された大型の土壙状に掘り込まれた遺構である。

東西方向は3m以上、南北方向は約4.6mを測る不整楕円形の形状を呈する。地山面を人為的に掘り窪めて、北端部分には大礫が配置されたように検出された。

埋土は、人為的に掘り窪められた地山面の上に、黄褐色土と茶褐色土が重ねられていた。しかし盛られた土のうち、中间部分には小礫とともに暗黄茶褐色土と淡黄褐色土が縞状に盛られていた。

遺物の出土はなく、性格は不明である。その他、堀切の西侧に、約6mと15mの地点にトレンチを設定して遺構の有無を確認したが、表土の直下は岩盤で、遺構らしいものは確認できなかった。

遺構に伴わない遺物（第38図、図版16）

主に郭面北側斜面を中心に若干の遺物が出土した。その中でも実測可能な土器6点(1～6)、瓦片2点(7・8)、石器1点(9)、金属器7点(10～16)について図示している。

1は、備前焼大甕の肩部である。北側斜面の土壙2・3付近から出土した。外面調整は全体にヘラケズリを行っている。内面は外面同様ヘラケズリを行なって、上半部では粘土紐の巻き上げ痕を消すように接合面に指頭圧痕を施して、さらに指によるナデが行なわれている。焼成は良好で、色調は外側がにぶい赤褐色で、内面が灰赤色を呈する。時期的には15世紀後半から16世紀初頭のものと思われる。

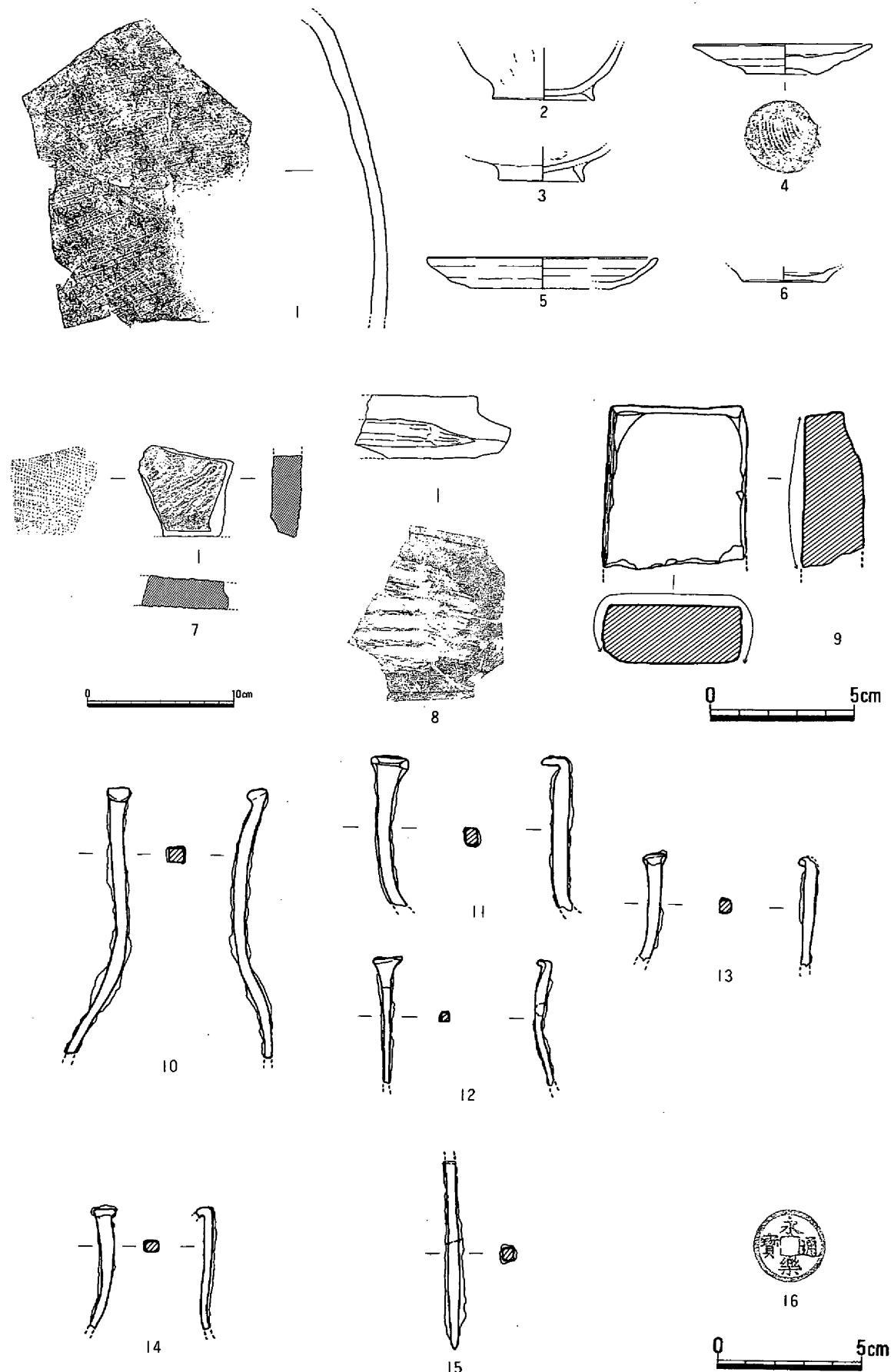
2・3は、土師質土器椀の底部である。ともに上半部分を欠き、北東斜面から出土した。焼成はともに良好である。2の調整は、外面がユビオサエの後にナデを施し、高台部分はヨコナデによって調整されて胴部に貼り付けられている。内面は外面同様にユビオサエの後にナデを施されている。外面には若干、指頭圧痕が認められる。現存高は38mm、高台の径は68mmを測る。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。3の外面調整は全体にナデ、高台部分は指ナデによって調整されている。内面はユビオサエの後にナデが施されている。内面には部分的に指頭圧痕が認められる。高台部分の貼り付けは、外面にはその痕跡が顕著である。また内側の調整は不十分で、体部との接合部分には段が認められる。現存高は24mm、高台の径は56mmを測る。色調は内外面ともに浅黄橙色を呈している。

4～6は皿である。南西斜面から出土した。4以外は破片で出土したので残りが非常に悪い。しかし焼成はすべて良好で、種別として4は須恵質、5・6は土師質である。4は口縁部の一部分を欠くが、ロクロによる調整が丁寧に行なわれている。外面の高台となる部分は、ロクロ回転中に糸切りによって切り取られているが、切り取り後の調整は未調整である。口径は122mm、器高は21mmを測る。色調は内外面ともに灰色である。5は粘土板を指によって巻き上げたのち、全体に仕上げとしてナデを施している。口径は155mm、器高は約22mmを測る。色調は内外面ともににぶい橙色を呈している。内面には全体的に煤のようなものが付着していることから灯明皿として使用されたのではないかと考えられる。6は5と同様に厚い粘土板を指によって巻き上げて、全体に仕上げとしてナデを施したものである。底部の径は57mm、現存高は11mmを測る。色調は内外面ともににぶい橙色を呈している。7は北東斜面から出土した須恵質の平瓦である。調整としては凸面凹面ともに全体に布目痕を残している。側面および凸面側縁はヘラによる切り離しと面取りがなされている。色調は灰色を呈している。8は主郭の中央北側斜面の表土直下から出土した丸瓦である。凸面は磨き状のナデが施されており、玉縁面と連結面にはヨコナデが行なわれている。凹面は布目痕を残しており、さらにその上から棒状の叩き具によってタタキが施されている。凹面の側縁部はヘラによる切り離しと面取りが施されている。色調は灰色を呈する。時期は凹面の調整方法から室町時代以降と思われる。

9は北東斜面から出土した砥石である。断面長方形の形状を呈し、その下半部分を欠く。4面中、3面が非常によく使用され、幅が狭い両側面は使用方向がはっきりとわかるものである。現存長57mm、最大幅49.5mm、最大厚20.2mmを測る。石材は流紋岩製である。

10～16は鉄製の釘である。10～15は北東斜面から、16は主郭の中央南側からそれぞれ出土した。断面はすべて正方形の形態を呈している。頭部は撥型に開き、打ちのばしてL字状に折り曲げている。

17は永樂通寶である。郭面の西端部分、虎口のL字状に整形された北側斜面から一点のみ出土した。完形品である。



第39図 遺構に伴わない遺物（土器1/4、石器・鉄器1/2）

第3節 その他の地点

第1地点 (図版7-20)

当該地点は寺山7号墳・8号墳の東側、約20~30mの地点に設定した調査区である。寺山7号墳・8号墳の付近までは比較的尾根の頂部が狭く、規模の大きな遺構の立地は考えにくい。しかし第1地点の周辺は安定した平坦面が現状でも認められる。当初の設計では尾根の頂部をさけて北側斜面に工事用道路を建設する予定であったが、設計変更によって頂部には周辺の畑に給水するポンプ場が建設されることとなり、急遽調査に着手した。

計4本のトレンチを設定し、表土除去を依頼者を通じて業者に委託して行なった。表土を除去すると明黄橙褐色の土が検出され、直下には岩盤が認められた。調査はトレンチに加えて、頂部の用地境まで範囲を広げて遺構の検出を行なったが、予想に反して全く遺構および遺物は認められなかった。

第2地点 (第39図、図版7-21)

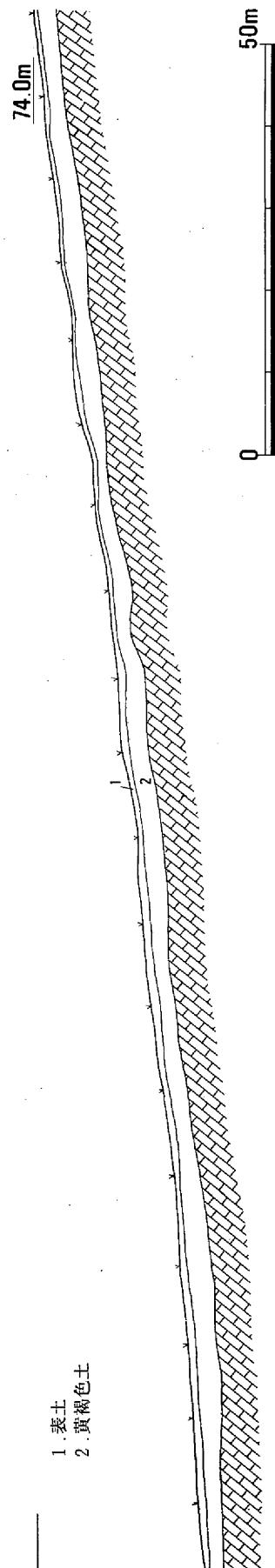
当該地点は、寺山7号墳・8号墳の東側に接して設定された調査区である。当該地点付近は比較的平坦な地形を呈しているが、古墳から東側では前述の第1地点にかけて緩やかに登っている。第2地点は、第1地点に先行して調査が行なわれたもので、第1地点付近から遺物の流入がなかったかの確認を行なうものであった。

全長19mのトレンチを設定して確認を行なった。表土を除去すると黄褐色土が認められ、直下に地山面が検出された。また当該地点においても遺構・遺物は確認されなかった。

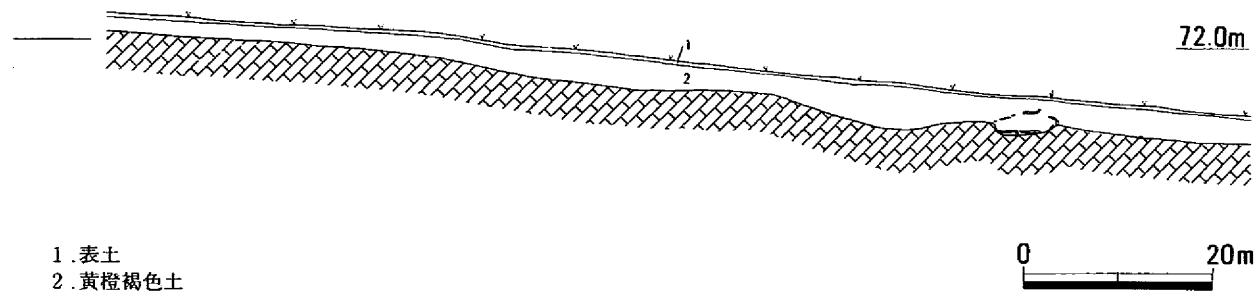
第3地点 (第40~42図、図版8-22・23)

当該地点は、寺山7号墳・8号墳から緩やかに上ってゆく約10mの地点に設定した調査区である。細い尾根の頂部といえども現状で確認できない遺構がまだ検出できるのではないかとの観点から尾根の頂部に並行してトレンチを1本設定した。表土を除去すると、黄褐色土と地山面・岩盤が認められた。その後トレンチの東端から約2mの地点から組合せ式の土器棺が出土した。その他、トレンチから遺構は確認されなかった。

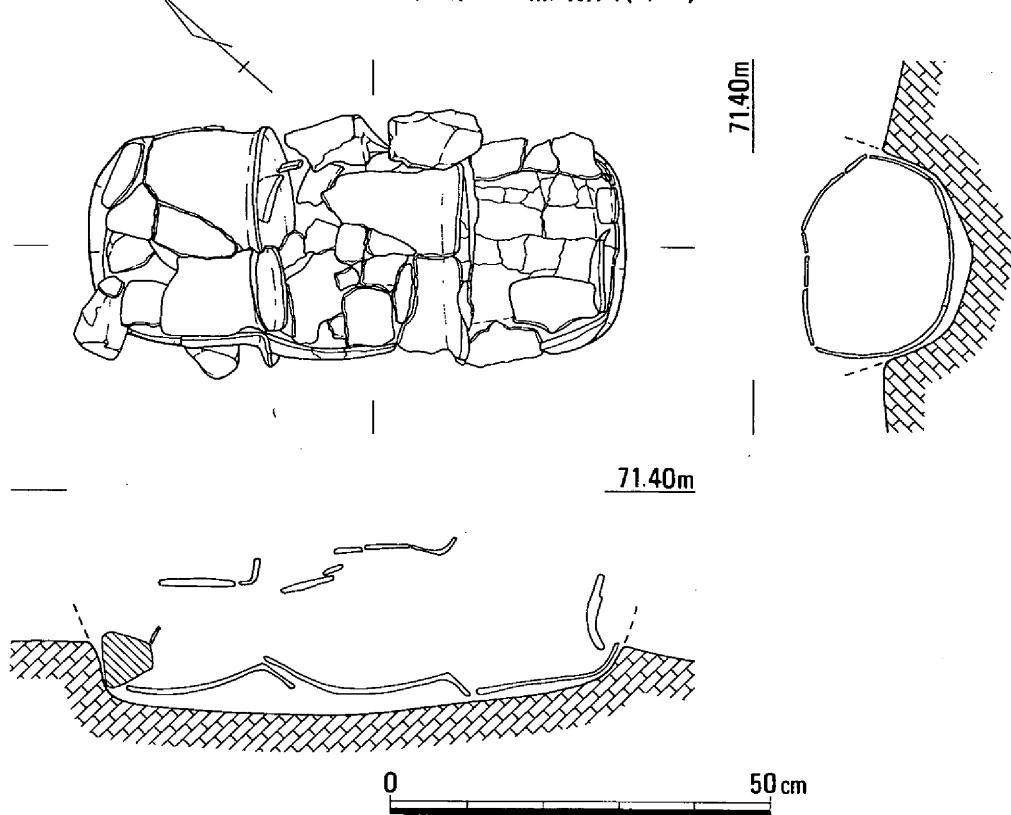
土器棺が出土した地点を広げて全体の遺構検出を行なったところこの土器棺は、地山面を約10cmほど掘り溝めたところに3個体の土師質の甕を組み合わせて埋納していた。覆土等の外部施設は全く認められなかった。また遺物は棺内外からなにも出土しなかった。



第40図 第2地点 断面(1/80)



第41図 第3地点 断面(1/80)



第42 土器棺 平面・断面(1/10)

出土遺物 (第42図、図版15)

1は東側に置かれていた土器である。上半部と底部を欠いている。外面はタテハケが施されており、底部に近い部分にはヨコハケがなされていた。内面はユビオサエの後に横方向のナデが施されているが、全体的に指頭圧痕が残存している。底部付近には補強のためか、調整の後に粘土を継ぎ足して厚みをもたせ、工具による横方向のナデが施されている。また外面には底部に近い部分に糲圧痕が1カ所認められる。現存高は195mm、胴部の最大径は298mmを測る。焼成は良好で、色調は外面が橙色で、内面がにぶい橙色を呈している。

2は中央部分に置かれていた土器である。底部を欠いている。口縁部から頸部のくびれ部分までは丹念にナデが施され、口縁部の端部は調整の最終段階で下方に張り出すように整形されている。調整方法は1とほぼ同じで、外面が胴部全体にタテハケが施されているが、底部付近はヨコハケも施されている。内面は、ユビオサエの後にナデが全体の施されており、下半部分には指頭圧痕が残存している。また部分的にヘラ状の工具をあてた痕跡も認められる。口径は246mm、胴部の最大径は256mmを測

る。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色を呈する。

3は西側に置かれていた土器である。底部を欠いている。この土器は、他の2個体のものとは調整方法が若干異なっている。口縁部付近の調整は、2と同じように丹念にナデが施されているが、ナデの後にユビオサエを行なうことで口縁部に厚みを持たせている。胴部の外面調整はヘラミガキが、内面は全体にナデが施されている。口径は268mm、胴部の最大径は239mmを測る。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色を呈している。

形態的には赤磐郡山陽町便木山遺跡出土のK7に類似しているので、時期的には6世紀後半の所産ではないかと考えられる。

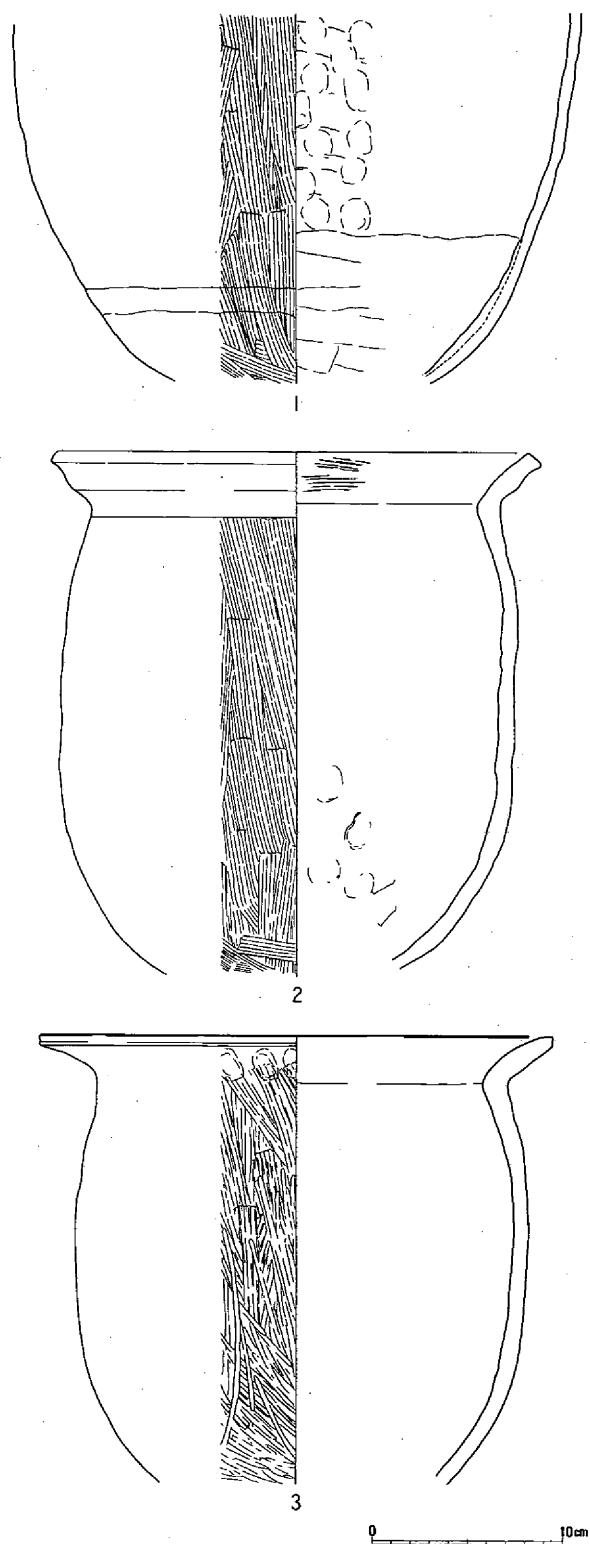
第4地点（第43～45図、図版8-24）

当該地点は寺山9号墳の西側に接した調査区である。当初、トレーナチを南北方向に設定したところ、地山面を掘り込んだ古墳の周堀状の遺構が確認され、さらに平面的に調査範囲を広げると、周堀状に掘り込まれた遺構が設定した調査区の西側では、南側へ曲がらずに地形にあわせるかのように蛇行しながらのびていった。

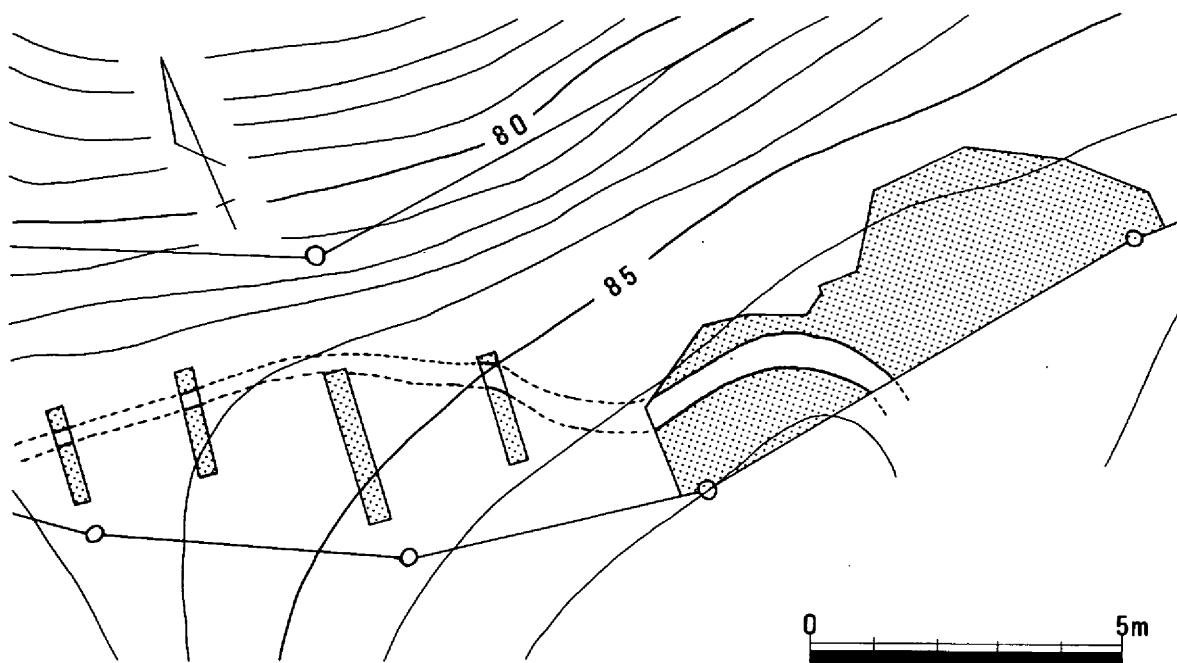
これらのことから、他に遺構らしきものが現状では認められること、また尾根の頂部に沿ってのびていること、等から考えて古道の跡ではないかと考えられる。

出土遺物としては、調査区の中央部分から丸瓦片4が1点出土した。4は凸面が叩き痕、凹面は布目痕を明瞭に残り、側面はヘラによる面取りがなされている。使用された粘土が悪質ではあるが、焼成は良好で、色調は明オリーブ灰色である。

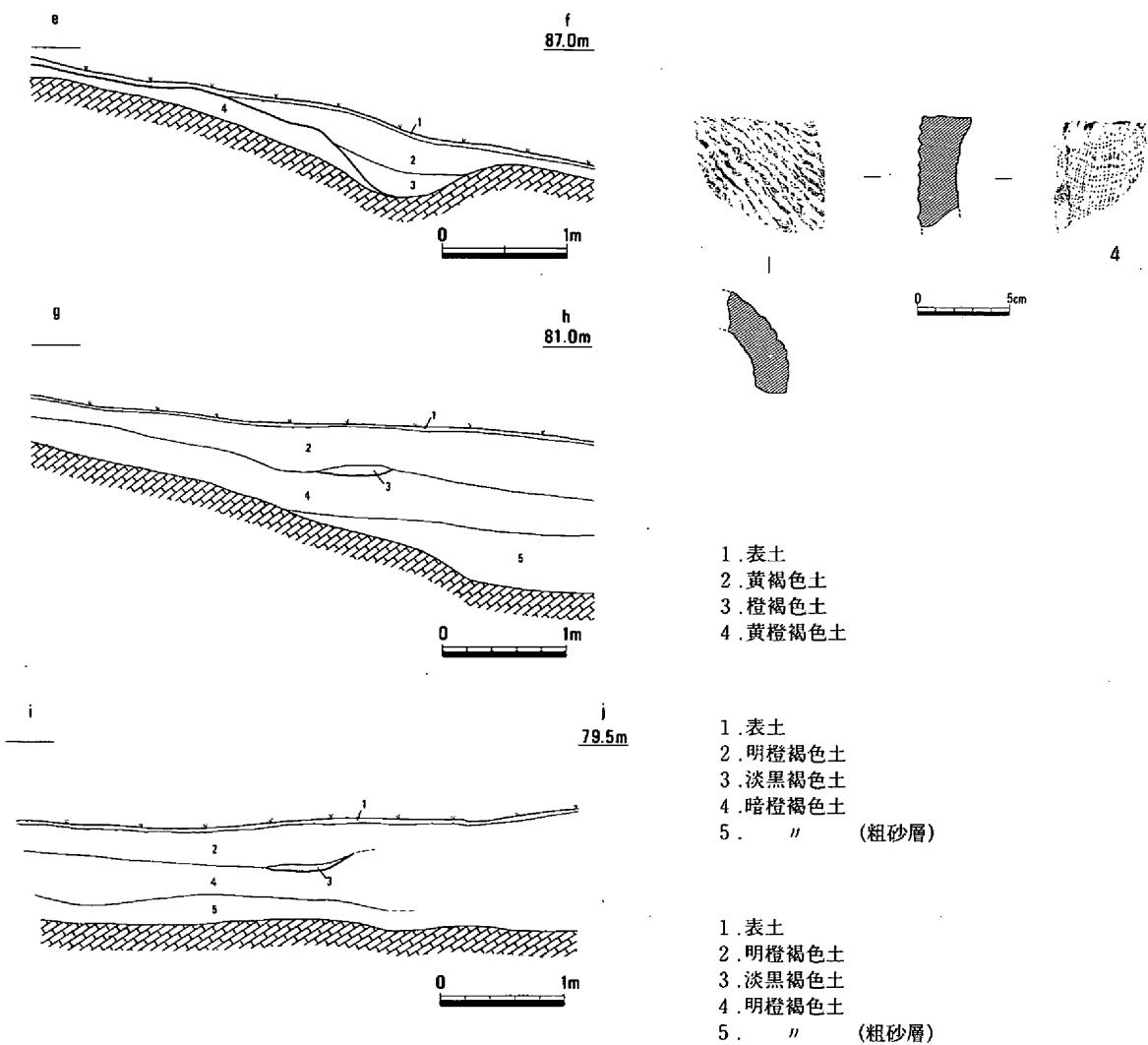
時期は不明である。



第43図 土器棺(1/4)



第44図 第4地点 平面(1/300)



第45図 第4地点 各断面および出土瓦片(1/60、1/4)

第4章 考察

今回の調査は、弥生時代の墳丘墓から中世期の山城跡まで時代幅・遺構と遺物の出土状況等非常に興味深く、また示唆に富むものであった。ここでは寺山7号墳と出丸跡について、そしてその成果にあわせて山頂部分の大日幡山城についても若干の知見を得たので述べてみたい。

寺山7号墳

寺山7号墳の外部施設には、墳丘上に前半期の古墳にはよく見られる葺き石が全く検出されなかつた。多分に墳丘を形成していた盛土部分が流出したためとも考えられるが、結果何も確認されなかつた。また7号墳は円墳として報告したが、北西側の墳端が明確ではないものの隅丸方形状の形状を呈しており、あるいは方墳の可能性も考慮しなければならないかもしない。

次に主体部についてであるが、墳頂部分から1ヵ所、木棺直葬の形態で検出された。墓壙の掘り方が検出面から約10~20cmと浅かったが、棺痕跡も検出できなかつた。しかし棺の大きさなどから考えると、墓壙の深さは数十cm、盛土は約1mほど現状より高かったものと推定されるが、須恵器などが特に西側周堀内だけに堆積していたことは、この地点が現在の山道として使用されていたことから人為的に削平された可能性が考えられる。

7号墳の出土遺物は、大きく土器類と金属器に分けられる。土器類はさらに土器と埴輪に分かれる土器の中では唯一、時期が押さえられる須恵器は、田辺編年ではTK208~23の中におさまる。⁽¹⁾ また須恵器とともに出土した土師器は破片であったために明確な時期は認められない。埴輪については、川西宏幸氏の分類編年に従えば、IV期に比定される。一部のものにV期の初現的様相を呈する埴輪片が含まれているが、大方IV期の範疇に入るものと考えられる。また線刻文を有する埴輪片は、類例としては瀬戸町の陣場山遺跡群から出土した埴輪棺、倉敷市王墓山遺跡群の西の平古墳・法伝山古墳の円筒埴輪に認められるのみである。⁽²⁾ 今回出土した埴輪片の示す内容が、出土状況などから不明であることを残念に思われるが、描かれた線の鋭さなどから、なんらかの意味を為すものであることは認められよう。

金属器は鉄製の武器類・農工具類・釘類に分けられる。出土したすべての鉄器の中で釘と思われるものが多数出土している。その構成比率を見てみると、鎌など武器類が全体の46%、以下、釘類は45%、鎌・刀子等の農工具・小型品類は9%を占めている。釘とおぼしきものが、鎌とともにほぼ同数出土している。釘は大型品と小型品があり、大型品については棺釘の可能性を指摘した。棺釘の存在については、県下のこの時期には類例がなく、同時期と考えられる総社市の隋庵古墳などのように鎌を用いて棺を打ちつけている例が多い。⁽³⁾ また小型の釘については小型の箱に用いられたとしたが、本質が残存する28などはその可能性があると思われるが、38~43といったものは理解に苦しむところである。今のところでは馬具の銜部分が出土しているので馬具に伴う鉄鎌の可能性を指摘するに留めておきたい。棺の南側から出土した直刀は、白杵勲氏の分類編年によれば5世紀後半にもとめられる。⁽⁴⁾ このことは先に指摘した須恵器の時期と同じである。また直刀の出土位置や柄の方向から頭位は東側と考えられる。本文では触れなかったが、主体部内から青銅製品の破片が2点出土している。出土地点は不明であるが、青銅製品の副葬が行なわれていたかもしれない。馬具の形態については、この時期の出土例が当該地区近辺では確認されていないことから類例は不明である。県下全域にその類例を

求めるならば、津山市教育委員会が調査を行なった一貫西遺跡の3号墳から出土した轡部分があたるものと考えられる。ただ寺山7号墳から出土したものは引手が明確に復元ができず、また一貫西遺跡3号墳出土の轡のような粗雑感は認められない。時期的には一貫西遺跡3号墳は、出土した須恵器から5世紀末墳としているので寺山7号墳の時期とも符合する。

以上のことから寺山7号墳の時期は5世紀後半と推定される。また西側に隣接している寺山8号墳については7号墳より先行することが周堀の状況からわかっているので、5世紀後半以前であることがわかる。

大日幡山城出丸跡

県下の多くの城郭において実際に発掘調査が行なわれてたものは少ない。今回の発掘調査では調査範囲等の問題もあるが、わかったこととして遺構が全体的に希薄で、山頂に位置する大日幡山城に対して独立的に郭が構成されているが単独のみでは有効な攻撃・防備が為し得ないこと、また生活を行なうために必要な水の手が現状では全く認められなかったこと、遺物の出土状況もほとんど認められず生活の跡が感じられない、などから当該城跡が山頂部分の本城に伴って形成された出丸跡であるとの結論に至った。なお、郭面上に遺構が全く検出されなかつことを見方を変えるならば、立地的に東側の吉井川、千町平野が見渡せるので見張り台として、また広い郭面を有するので有事には兵士の待機所などとして使用されたのではないかと推定される。

時期は出土遺物が少なく年代決定が困難ではあるが、北側斜面から出土した備前焼片が示す年代が15世紀後半から16世紀初頭であり、郭面西側の虎口付近から出土した永樂通寶の初鑄年代が1408年であることから上限として15世紀中頃、室町時代前半期がもとめられるであろう。

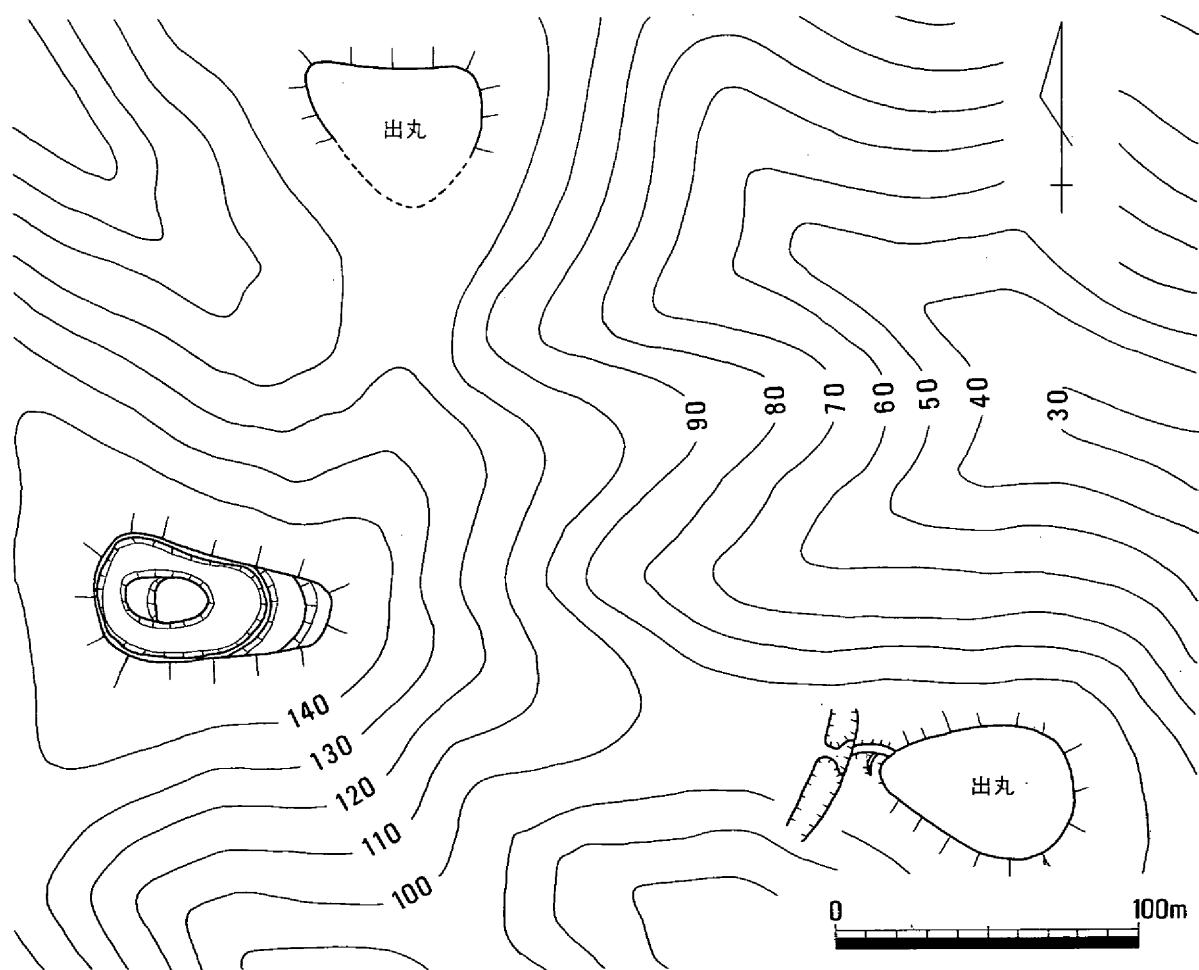
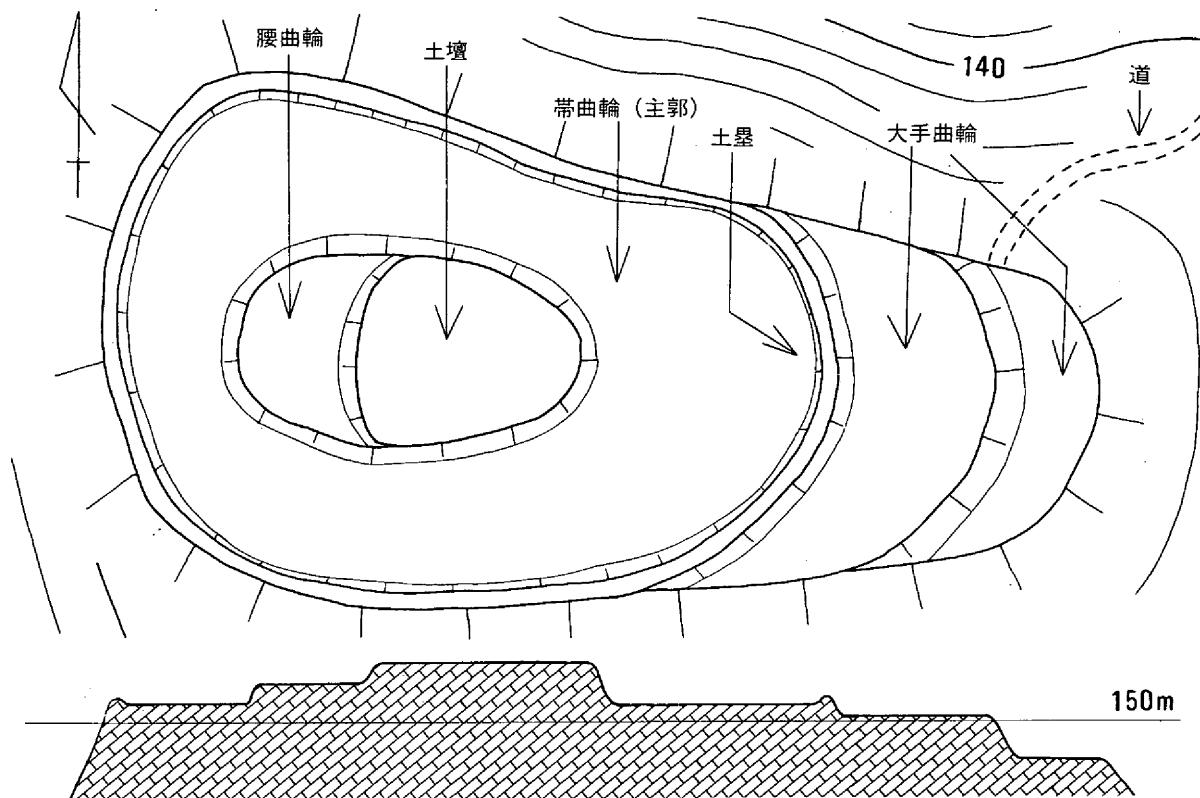
大日幡山城について（第47図）

現在に至るまで大日幡山城については、岡山市教育委員会による遺跡の分布調査が行なわれていただけで、発掘調査をはじめ詳細な測量図さえ作成がなされていない山城の1つである。また文献史料から見てみると、文明15（1453）年の福岡合戦の際に、松田方の援軍であった備後国の山名俊豊が本陣を置いたことが知られている。しかしその前後の状況については判然とはしない。今回、東側に位置する出丸跡の発掘調査を実施したこととあわせて縄張りの踏査を行ない、将来加筆・訂正がなされるであろうが大日幡山城について若干の知見について述べてみたい。

大日幡山城の遺構は、現状では径約20m、高さ約2mの土壇が確認されている。⁽⁹⁾ 改めて確認してみると、海拔約150mの山頂部分に東西方向に長い隅丸長方形の形狀を呈した山城跡が確認できた。

その縄張りを詳細に見てみると、最も高い山頂部分には、東西約9m、南北約14mの長方形状の土壇が土盛状に形成されている。この長方形状土壇の西側には変則的に東西方向約10mの腰曲輪が付属している。さらに土壇から1段下がった地点には土壇を囲むように帶状に曲輪が形成され、この曲輪の端部には高さ約1mの土壘が確認された。この土壘に囲まれた面が主郭部分になると推定される。帶状の曲輪から東側へ約3mの比高差を経て、東端の幅約12mを測る三日月状の大手曲輪に至る。この曲輪の東北端部には北側の出城に向かうと思われる斜面を掘り窪めた道が接続しており、虎口が存在するものと推定されるが現状では確認できない。

これら構造的特徴から見ると、しっかりとした本格的な有事籠城型の山城と考えられ、福岡合戦の際に短期間だけ使用するために築造された俄造りの城ではないことは明白である。また有事籠城型の山城ならば平時の生活拠点となる根小屋が山麓にあるものと考えられるが、字名の検討や付近の発掘



第46図 大日幡山城 繩張略図および遺構配置図(1/600、1/2500)

調査がほとんど行なわれていないことから未確認である。また遺物は認められなかった。

最近の研究によれば、南北朝期から室町時代前半期の山城の特徴は、連絡用・守備用の帯曲輪を重視しており、比較的粗雑で平面的であるのに対して、戦国期の山城は築城目的が純軍事的から領国支配に重点が移ったことから石垣等が築かれて高さを強調した作りを為している。このことから大日幡山城を見てみると、土壇を中心とした広い帯状の曲輪が形成され、東側の大手曲輪などが高さをもって築かれている。また文献においても文明年間以前のことが判然としないが、南北朝期から室町時代前半期の山城と戦国期の山城の中間的構造を呈していると考えられるので、縄張りの形態のみで考えるのであれば、室町時代前半期に築城されたと考えることが妥当と思われる。

この他、出丸跡ではないかと考えられている遺構が今回調査を行なった東側のほかに、北側1ヵ所と南側に2ヵ所指摘されている。北側については、『岡山市埋蔵文化財地図』では、わずかに土壇が確認されているだけでその規模は不明である。踏査の結果、東西約7m、南北約8mの三角形状の平面が認められた。土壇・土塁等の存在は不明であるが、郭面の端部は南側が不明瞭ながら、その他は端部を切り出して築造されていた。また南側2ヵ所の山城跡については、今回の調査地点から距離が離れていることや、発掘調査と並行しての確認作業であったので確認ができなかった。

註

- (1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- (2) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 1978年
- (3) 濑戸町史編纂委員会「陣場山遺跡群」『瀬戸町史料集』 1985年
- (4) 倉敷考古館「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報』第10号 1974年
- (5) 総社市教育委員会『隋庵古墳』 1965年
- (6) 白杵勲「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 1984年
- (7) 津山市教育委員会「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第33集 1990年
- (8) 兵庫県埋蔵銭調査会『日本出土銭総覧』 1996年
- (9) 岡山市教育委員会『岡山市埋蔵文化財分布地図』 1983年
- (10) 村田修三「戦国期の城郭」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年
角田誠「近畿地方における南北朝期の山城」村田修三編『中世城郭研究論集』 1990年

報告書抄録

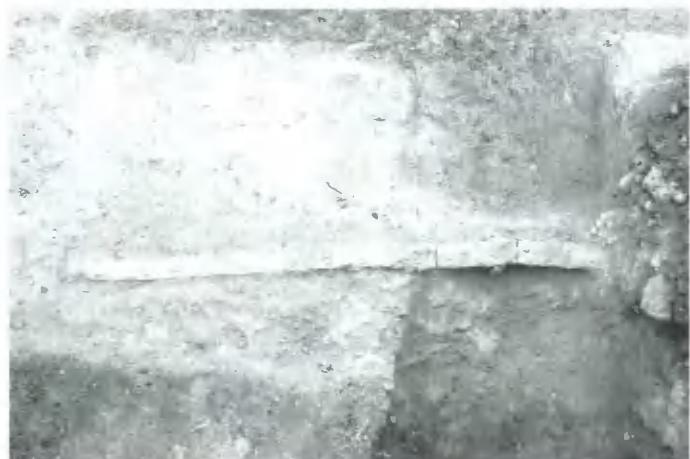
ふりがな	てらやま こ ふんぐん わお ひばたやまじょうでまるあと							
書名	寺山古墳群・大日幡山城出丸跡							
副書名	岡山浄水場建設に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	118							
編著者名	根木智宏							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-01 岡山県岡山市西花尻1325-3 Tel (086)293-3211							
発行機関	岡山県広域水道企業団 岡山県教育委員会							
所在地	〒703 岡山県岡山市古京町1-1-17 Tel (086)271-0010 〒700 岡山県岡山市内山下2-4-6 Tel (086)224-2111							
発行年月日	西暦 1997年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査要因
		市町村	遺跡番号					
てらやま 寺山 こ ふんぐん 古墳群	おか やま けん おか やま 岡山県岡山 し てらやま うち が 市寺山・内ヶ はら 原	33201		34度 41分 45秒	134度 4分 39秒	19950401 ～ 19950630	620	岡山浄水 場建設に 伴う発掘 調査
おお ひ ばた やま 大日幡山 じょうでまるあと 城出丸跡	おか やま けん おか やま 岡山県岡山 し てらやま うち が 市寺山・内ヶ はら 原	33201		34度 41分 49秒	134度 4分 30秒	19950701 ～ 19950930	1780	
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
寺山 古墳群	墳丘墓 古墳 古道	弥生時代 古墳時代 中世	墳丘墓 古墳 古道	弥生土器・須恵器・ 土師器・瓦片・鉄器		弥生時代末以降、断続的 に構築された墓域 尾根頂部へ登る道		
大日幡山 城出丸跡	山城	中世 (室町時代～ 戦国時代)	山城	備前焼・皿・鉄器・ 古銭		中世末の城郭群を構成 する出丸跡		



1. 寺山 7 号墳・8 号墳
調査前 全景
(東から)



2. 寺山 7 号墳主体部
検出状況(西から)



3. 寺山 7 号墳主体部
直刀出土状況
(南から)

図版 2



4. 寺山 8号墳主体部
検出状況(西から)



5. 寺山 7号墳・8号墳
調査終了全景
(東から)



6. 寺山 9号墳
調査終了全景
(西から)



7. 出丸跡調査前全景
(東から)



8. 堀切部分
調査前全景
(東から)



9. 柱穴 1 完掘状況
(東から)

図版 4



10. 土壌 1 完掘状況
(東から)



11. 土壌 2 完掘状況
(東から)



12. 土壌 3 完掘状況
(東から)



13. 溝状遺構完掘状況
(西から)



14. 堀切部分（南側）
検出状況(南から)



15. 堀切・土壘
調査終了全景
(北西から)

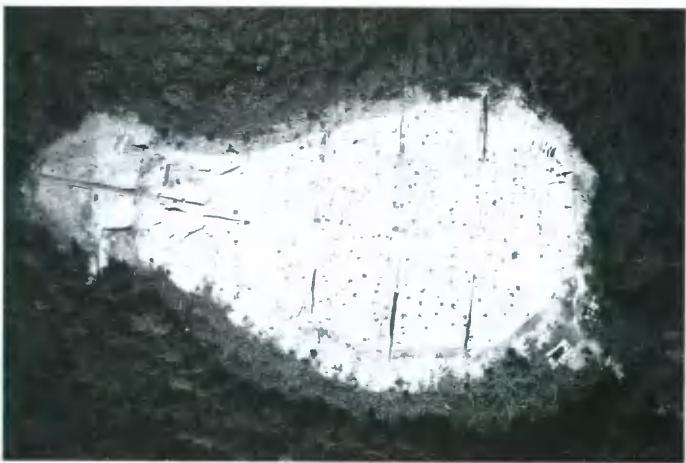
図版 6



16. 構築遺構検出状況
(東から)



17. 構築遺構土層断面
(南から)



18. 出丸跡調査終了全景



19. 出丸跡全景
(福岡城跡を望む)
(南西から)



20. 第1地点作業風景
(南から)



21. 第2地点
調査終了全景
(西から)

図版 8



22. 第3地点土器館
検出状況(東から)



23. 第3地点土器館
出土状況
(南から)



24. 第4地点
調査終了全景
(北から)



1

2



4

5



13

寺山 7 号墳出土須恵器・埴輪(1)

図版 10



14



17

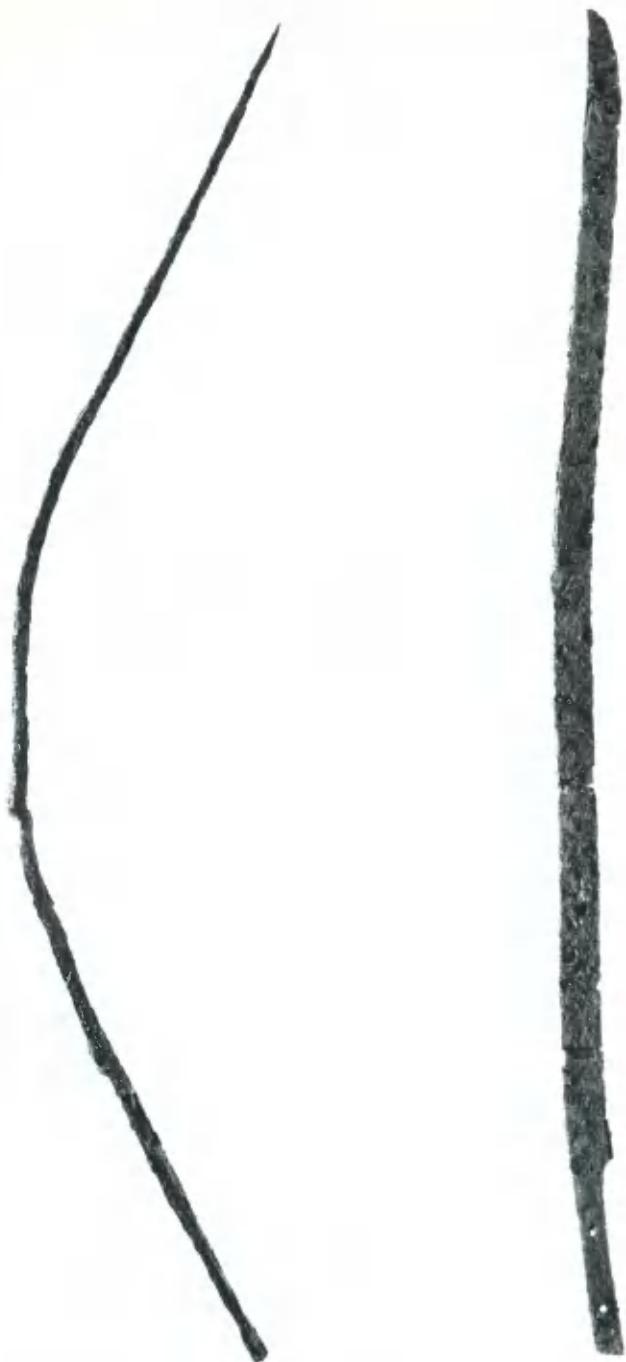


16



19

寺山 7 号墳出土埴輪(2)

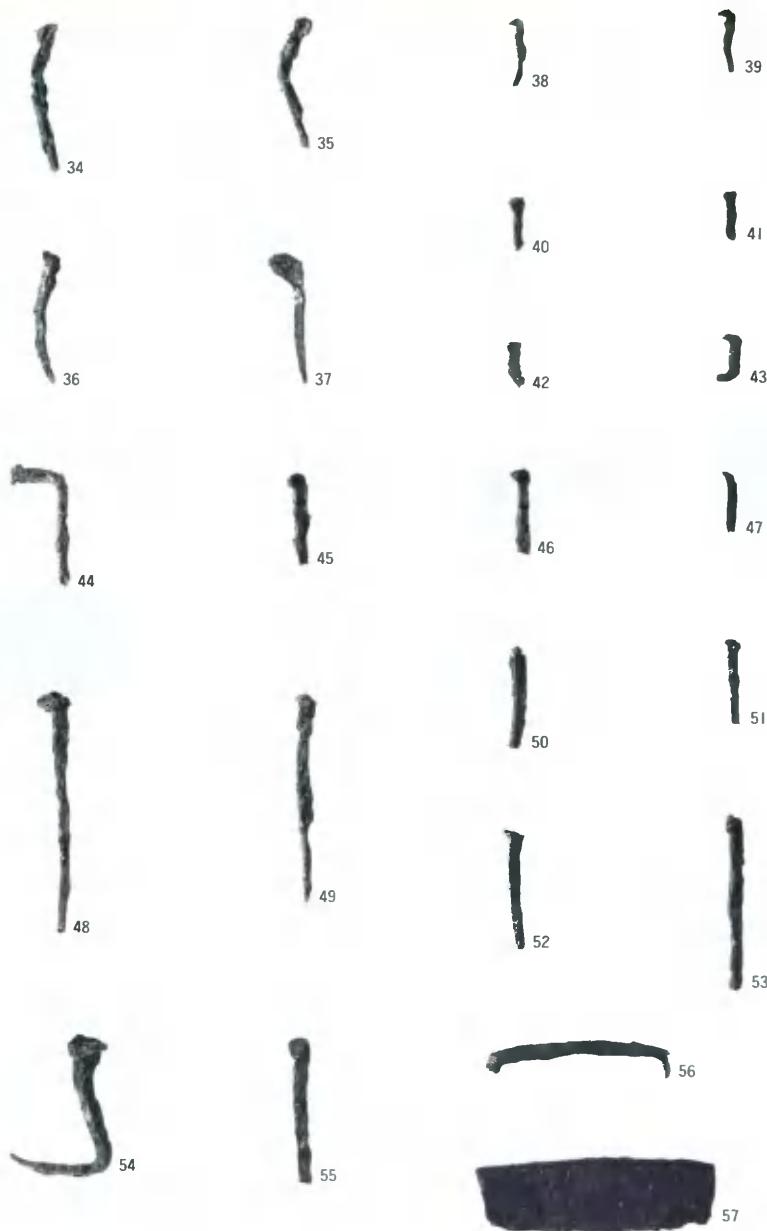


寺山 7号墳主体部内出土直刀

図版 12



寺山 7 号墳周堀内出土鉄器(1)



寺山 7 号墳周堀内出土鉄器(2)

図版 14



58



59

60



61

寺山 7 号墳出土馬具



1



2



3

第 3 地点出土土器棺

図版 16



3



4



9



16



10



11



13



12



14



15

出丸跡出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告118

寺山古墳群 大日幡山城出丸跡

岡山浄水場建設に伴う発掘調査

平成9年3月20日 印刷
平成9年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発行 岡山県広域水道企業団
岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印刷 山陽印刷株式会社